令和7年2月6日
第3回全体研究会

小学部研究
実践報告

〇情報活用能力とは…？学習の基盤となる資質・能力
〇情報を扱う＝ICT機器を使う　いやいや…
〇小学校はすごいICT機器活用しているよね…
〇小学部段階における情報活用能力って？
〇この子たちの『情報』ってなんだ？
〇なにをどう指導していけばいいのだろうか…

研究テーマ

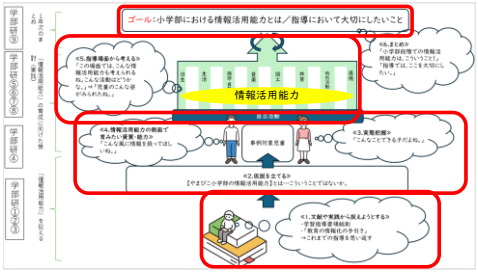
「小学部段階における情報活用能力を育成する指導場面の検討」

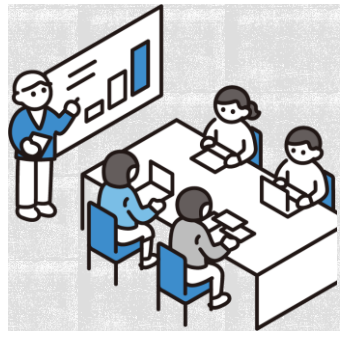
研究目標

（1）本校小学部の児童に必要な“情報活用能力”とはどのようなものかを捉え、それを育成するにはどのような方法があるか、また指導において大切なものは何かを検討する。

（2）学部研究（文献を読み解く、事例検討等）を通して、“情報活用能力”に関する考えを深め、小学部の教員としての指導力を向上する。

研究方法と計画





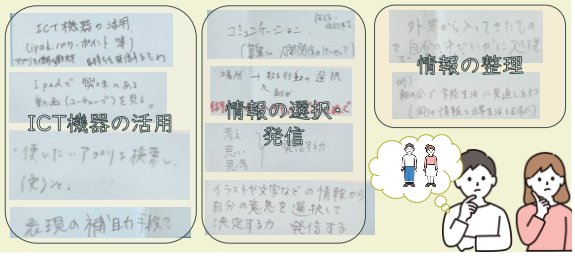
研究実践

①情報活用能力を捉える

②事例検討

③まとめと課題

〈情報活用能力〉と聞いて…イメージの共有



学習指導要領総則(p207,208)を読む

→「情報活用能力を育む上で大切となる視点」

(a)近年の「ICT機器の活用」の流れと「情報活用能力」の区別をつける必要があること

(b)五感を使って感じたり、気付いたりすることが情報を得る基礎ではないかということ。

(c)得た情報を生活の中で使うことが大事であること。

(d)得た情報を伝える、発信する場があることが大切であること。

(e)小学部における「情報」「情報手段」は広義であることを理解すること。

(f)低学年「外界のものを取り入れる、五感から試す」高学年「言葉、言葉にのる思いをくみ取る、伝えたいという思いをもつ」がキーワードとなるのではないか、ということ。

(g)外界に関心を向け、情報を取り入れたい、知りたい、伝えたいといった思いを育てることが大切ではないか、ということ。

教育の情報化に関する手引き(p23,24)を読む

→「情報活用能力を構成する資質・能力」とは

小学部における〈情報活用能力〉の捉え(我々の考え)

低学年

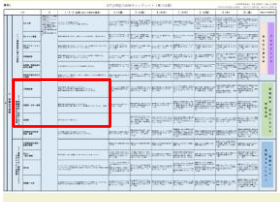
〈知技〉情報を得る、外へ意識を向ける(気付く)
〈思判表〉情報を選択する、イラスト・写真と事象を結び付ける
〈学び・人間性〉事象・物事に興味をもとうとする、外へ疑問をもとうとする、気付きを共有しようとする

高学年

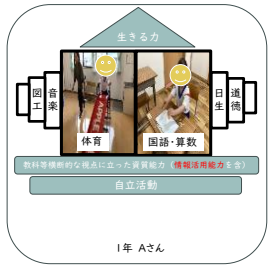
〈知技〉教師(人)を含め外の環境から情報を得る
〈思判表〉自分にとって必要な情報を「…ということはこうかな?」と考えるために使う
〈学び・人間性〉教師(人)を含め外の様子を意識して「こうかな?」と思おうとする。

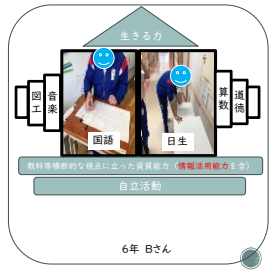
ICT活用能力実態チェックシートを読む

→小学部段階でより重要視したいことの明確化

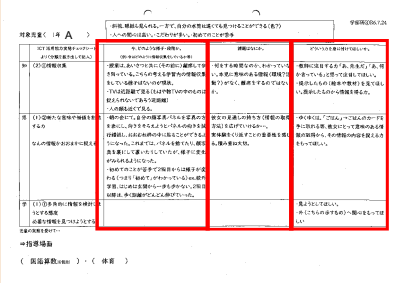


事例対象児童・指導場面の選定





Aさんについて



Aさんについて

〈現状や担任の思い〉
・情報収集の点で、低学年の中で一番の困難さをもっているのではないか。（授業中の離席＝することがわからない、近距離での観察等の様子＝提示されているものへの関わり方から）
・本人が状況を捉えて、理解し、活動に参加するための支援や学習に向かおうとする環境づくりが必要ではないか。その支援や環境づくりは、どの授業場面にも通ずるのではないか。
・外（こちらが示すもの）への関心をもってほしい、見ようとしてほしい。

〈身に付けさせたい情報活用能力〉
知：ものや人から、自分のやること（情報）を得る。
（本児にとっての情報は、自分にダイレクトに関わるものとなるという考えから）

思：知っていること・ものと、もの・言葉を結びつける。

学：「やりたい」「たのしかった」を共有しようとする
（相手に向かった発信、その良さを感じる）

Aさんにとっての情報活用能力

・情報を得ようとする力（見よう、聞こう、触ろう、やろうとすること）

Aさんにとって必要な手立て、指導において大切にしたいこと

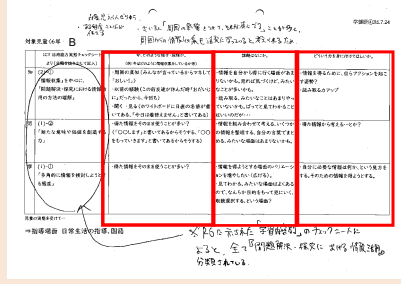
・繰り返し取り組むことで、「やってほしいこと（授業の流れ）」を伝えること

・本児にとってわかりやすい言葉を使うこと、また言葉数の精選をすること

・物理的に視界を広げる手立て（教材の提示位置、書見台の活用）

・「今できること」をベースにした授業づくり、活動設定をすること

Bさんについて



Bさんについて

〈現状や担任の思い〉
・最近、友達や教師の真似をする等、「周囲の影響を受けてそれが表に出る」ことが多く、周囲からの情報収集が活発になってきていると考えられる。
・情報を自分から得に行くことはあまりない。

〈身に付けさせたい情報活用能力〉
知：情報を得る。（ポイントとなるのは、「言葉」？）

思：得た情報を使う。（知った言葉を使う。「この場面ではこうする」と知ったことをやってみる）

学：得た情報を使うよさに気付く。（相手が反応してくれたのようなよさも含む）

Bさんにとっての情報活用能力

・情報を自分から得にいく力

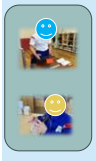
Bさんにとって必要な手立て、指導において大切にしたいこと

・得た情報に意味づけをしていくこと

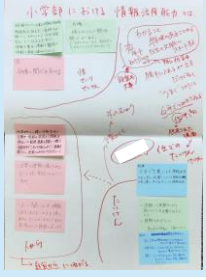
・もっている力を活かして手段を広げていくこと

・「いつもと違う」状況を意図的につくること

まとめと課題



小学部段階の児童



まとめ①「小学部段階における情報活用能力とは」

〇情報を整理する力

〇人（友達を含む）から情報を得る力

〇体験をもとに情報を得る力

まとめ②「指導において大切にしたいこととは」

・環境設定をすること（情報を得たり、発信しやすい環境を意図的に設定する）

・得た情報を伝える場面をつくること

・言葉の力をつけること（語彙を増やすことを含む）

・体験や経験を大切にすること（それを伴った身のある言葉をもつこと）

・興味のあることを入り口に、やりとりを広げていくこと（人との関わりの基盤づくり）

今後の課題

「小学部」の視点から→「低学年」「中学年」「高学年」の視点へ

小学部段階でのICT機器の活用の検討

「情報活用能力」と各教科等の関係性の再確認の上、授業場面の検討を

ご清聴ありがとうございました。

中学部研究

令和7年2月6日
第3回全体研究会（実践報告会）

研究テーマ

情報活用能力に着目した授業づくり
～情報機器等の利用を含めた情報活用能力の育成に必要な手立てを考える～

今年度の研究にあたって・・・

情報活用能力

教科を超えた学習の基盤となる資質・能力

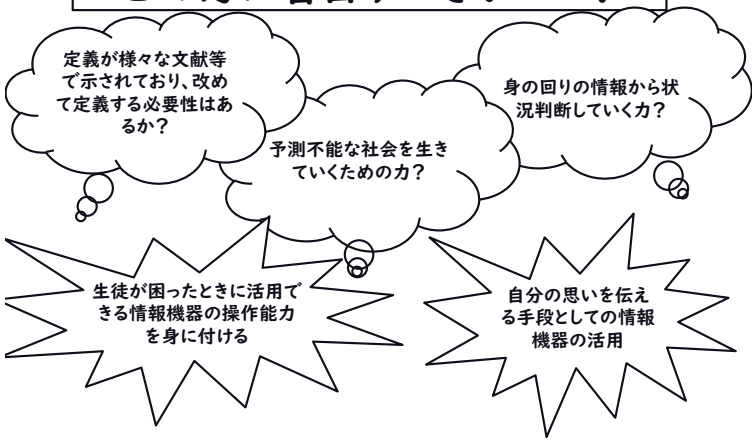
↓

中学部段階
「学習場面において情報機器を利用し、基本的な操作能力を育てる。」

↓

情報機器利活用にとどまらない授業実践の必要性

情報活用能力の捉えについて どの力に着目すべきか・・・？



研究対象授業や指導場面

生徒が困り感を出しやすい時間

周囲に働きかけを自然な形で行うことができる環境

自分の意見や思いを安心して出せるような時間と環境

日常生活の指導

対象生徒①

中2　男子　難聴
発語がなく身振りサイン、筆談でのコミュニケーション
情報を周囲から得ようとする力の弱さ
自分が伝えたいことを伝えて満足している様子がある
インターネット検索、アプリ操作が身に付いている

2語文で他者へ伝えられるように
周囲への興味関心を高める
会話のやり取りを楽しいと思える経験を重ねる

対象生徒②

中3　男子　知的障害
これまでの学習を実際の生活へ生かせるようになっている
書字、発語の難しさがあり、やりとりの中で「間」を怖がるような様子

みんなに共感してもらえるうれしさを感じさせたい
自信をもたせ、自己肯定感を高める
聞き返される経験を減らす
より豊かな言語でのやりとり

実践の経過（中2男子）

・実態を複数の目で再確認
自分から動くことの難しさ
・やりとりのパターン化

目標の再設定

・経験したことを言葉に置き換える
・ICT機器は補助手段として
・朝の会の流れに変化をつける

ドロップタップの活用
「みんなのはなし」

実践の成果と課題（中2男子）

身振り、筆談での
やりとりの有効性
iPadでの授業中の発言
「伝えたい気持ち」の高まり

お互いの言いたいことが
正しく伝わっているか確認する
発話に限らない
発信方法の選択

実践の経過（中3男子）

Classnotebookを使い
話したいことを聞き取り
教師が入力

目標の再設定

メモアプリを使っての
音声入力
紙媒体での文章構成

発声の不明瞭さによる
誤入力を自ら手入力で
直す姿

実践の成果と課題（中3男子）

・情報機器の活用により困難さを克服する手助け
・自分自身が伝えたいことを自身が再確認でき、他者にもより分かりやすい方法で発信
・より豊かなやり取り

慣れている教師と友達との関係性の中でできることを違う場面でもできるようになること

中学部研究　成果と課題

生徒の表現方法の選択肢を設定する。
「発信方法の選択肢を設定すること」さらに「発信する場面に応じ臨機応変に発信方法を選び、使っていく力を生徒につけさせること」

実践についての見取りの評価
情報活用能力の「どのように伸ばしたいか」、「どの力を伸ばしたいか」を教師が明確に設定する

ご静聴ありがとうございました。

令和7年2月6日
第3回全体研究会（実践報告会）
中学部研究グループ

高等部学部研究
まとめ

令和７年２月５日（水）
第３回全体研究会

高等部研究テーマ

卒業までに身に付けさせたい
情報活用能力の整理

今年度の研究目標

（1）身につけさせたい情報活用能力について、授業の単元計画の中で扱う内容を検討し、授業づくりを行い、情報活用能力を育成するための手立てを検討する。

（2）授業実践後に手立てや目標について適切であったかどうかを検討し、授業改善につなげ、教職員の指導力と専門性の向上を目指す。

研究方法

①卒業までに身に付けさせたい情報活用能力の検討

生徒を療育手帳の区分をもとに4つのグループにわけ、グループごとに身に付けさせたい情報活用能力を検討した。

「ICT活用能力チェックシート」を用いて検討した。

①卒業までに身につけさせたい情報活用能力の検討

療育手帳A-1の生徒にとっては、ICT機器の画面に自らタッチしたり、注目したり、自分で操作したことの満足感を得るなどの力が身についていくとよい。

ICT機器の利用については、触った感触や音などアナログな情報を得ることで理解につながる段階である。そのため、ICT機器の活用については、教師が使用場面を精選することが大切である

①卒業までに身につけさせたい情報活用能力の検討

療育手帳A-2グループの生徒にとって、日常的に用いる日付や曜日などの情報を自ら得ることができることが大切である。そのために、自立活動や個別活動の指導で情報を集める能力を育んでいく必要が得る実態である。

自分から発信、表現しようとする力や発信を受け止めて理解する力、指示や話を受け取る、収集する力が高まるとよい。

①卒業までに身につけさせたい情報活用能力の検討

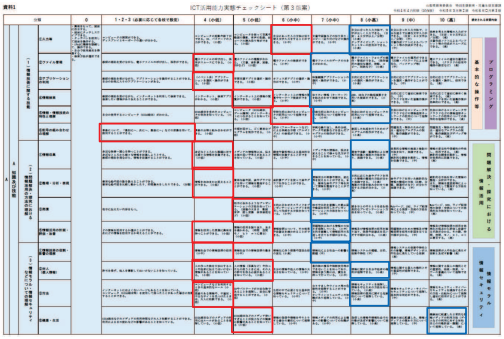
療育手帳B-1グループの生徒にとっては（4）、（5）が主になっているが、チェックシートの内容では（1）～（3）は大枠になっている。そのため、このグループではその部分をさらに整理して必要な情報活用能力について当てはめていく必要がある。

①卒業までに身につけさせたい情報活用能力の検討

療育手帳B-2グループの生徒にとっては、（7）の段階が主になっている。

社会に出た後も情報機器を扱うことが増えることが予想される。そのため、ある程度発展的な内容についても理解して活用できるようになってほしい。

①卒業までに身につけさせたい情報活用能力の検討



「ICT活用能力チェックシート」より

①卒業までに身につけさせたい情報活用能力の検討

「ICT活用能力チェックシート」より

研究方法

②対象授業での検討

対象授業を「社会／自立活動」とした。

➡ 調べ学習や学習した内容の発表や共有など情報活用能力の育成をねらう場面の設定がしやすい。

②対象授業（社会／自立活動）での検討

～自立活動グループ～

「季節を感じよう」

↓

好きな場面でボタンを押して写真を撮る

「家事に挑戦しよう」

↓

・誰かが喜んでくれることがわかること
・五感で感じた情報を適切に処理すること

感覚を広げる、感覚を得る、感覚を高める、人との関わりをもつことを目標に設定した。

②対象授業（社会／自立活動）での検討
～自立活動グループ～

ICT機器の利用について

教材として教師が用いることで、生徒に情報を示すためのツールとして有効活用できた

視覚的な情報を提示したい場合、活用は難しかったが、聴覚的な情報を提示する場合は有効であった

生徒に応じてICT機器の活用の仕方が変わる。ICT機器の活用が有効であるかどうか検討する必要がある。

②対象授業（社会／自立活動）での検討
～社会Aグループ～

教科等	社会A	単元名	災害から自分の身を守ろう	指導時期 指導時数	２学期前半 ９時間
単元目標	知識及び技能		災害の種類によって取るべき行動が変わることがわかる。		
	思考力・判断力・表現力等		校内の非常持ち出し袋や避難経路等を確認し、防災グッズについて調べたり考えたりする。		
	学びに向かう力・人間性等		災害が危険であることを理解し、緊急時に適切な行動を取る態度を養う。		
情報活用能力	知識・技能		どの情報を活用するか選ぶことができる。（１・２・３） 身近な物事へ関心をもつことができる。（１・２・３）		
	思考・判断・表現		話を聞いたり、写真等を見たりして情報を得る。（１・２・３） 入力した文字や文章を注目したり読んだりする、（０）		
	学びに向かう力・人間性等		うまくいかないときに繰り返し取り組もうとしている。（１・２・３）		

②対象授業（社会／自立活動）での検討
～社会Aグループ～

生徒によって情報の提示の仕方を変えたことで、理解が深まったことを実感できた

提示方法や発問する順序などについては、他の強化でも活かすことができた

意思の発信に課題のある生徒が多いため、どのように情報を伝えるか、どのように発信させていくかは今後の課題である

②対象授業（社会／自立活動）での検討
～社会Cグループ～

教科等	社会C	単元名	自然災害と自分にできること	指導時期 指導時数	２学期後半 ７時間
単元目標	知識及び技能		身近な地域の自然災害について調べ、災害から身を守るための行動と災害から人々を守るための活動を知っている。		
	思考力・判断力・表現力等		地域のハザードマップから安全な場所や危険な場所を読み取り、場面ごとに、どこに避難するかを考え、グループや全体に共有している。		
	学びに向かう力・人間性等		調べたことを振り返り、災害時や現在に備えとして、自分や家族を守るために何ができるのかを考えようとしている。		
情報活用能力	知識・技能		知りたい情報を組み合わせて検索できる。 効果的なプレゼンテーションの方法を知っている。		
	思考・判断・表現		情報をもとに意見を出すことができる。 表現方法を相手に合わせて選択し、相手や目的に応じ、自他の情報を組み合わせて適切に表現する。		
	学びに向かう力・人間性等		必要に応じて自分からタブレットなども活用しようとしている。		

②対象授業（社会／自立活動）での検討
～社会Cグループ～

様々な情報収集の手段を伝えたことで、生徒が自分に合った情報収集の方法を選ぶことができる

生徒にとって要点を絞って情報を得ることは難しかった

ICT機器を活用する機会を増やし、丁寧に情報活用能力についての実態把握を行う必要がある

②対象授業（社会／自立活動）での検討
～社会Bグループ～

教科等	理科社会B	単元名	地域の安全を考えよう	指導時期 指導時数	2学期 6回
単元目標	知識及び技能		地図の な場所		時に危険
	思考力・判断力・表現力等		学校周 地図の		について、
	学びに向かう力・人間性等		地図を		り組む。
情報活用能力 情報活用能力			ア レ		）
			収集した情報を絵や図、写真などを用いてまとめる。（5）		
	思考・判断・表現		提示された情報から、必要な情報を探し出す。（4）		
			調べたことを発表する。（4）		
	学びに向かう力・人間性等		調べるためのキーワードなどを自分で考えて情報を見つける。（3）		

そのために……

まずは学習内容に関する正しい知識を定着させる必要がある

自分が得た情報を相手にわかりやすく伝える部分に重点をおきたい

②対象授業（社会／自立活動）での検討
～社会Bグループ～

（1）グーグルマップをもちいた地図の要素の理解

（2）ハザードマップ上の身近な災害を理解

（3）身近な地域の危険な場所をまとめ、発表する

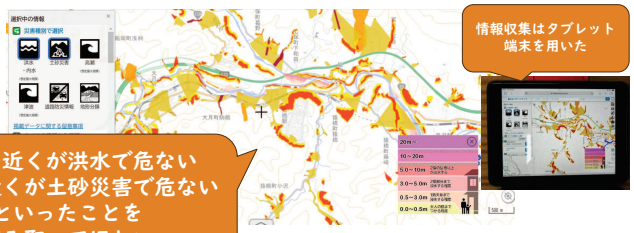
②対象授業（社会／自立活動）での検討
～社会Bグループ～

（1）グーグルマップをもちいた地図の要素の確認

地図上の道路や線路、川や山などがどのように記されているのか分かった上でハザードマップの読み取りにつなげたい。

②対象授業（社会／自立活動）での検討
～社会Bグループ～

（2）ハザードマップ上の身近な災害を理解



情報収集はタブレット端末を用いた

・川の近くが洪水で危ない
・山の近くが土砂災害で危ない
といったことを
読み取ってほしい

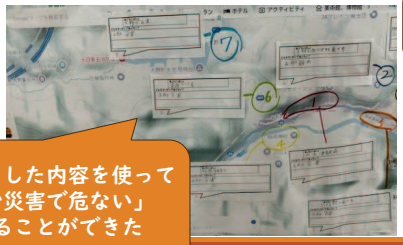
②対象授業（社会／自立活動）での検討
～社会Bグループ～

近隣の避難所を知る

・避難所が安全な場所にあること
・自宅周辺の避難所を
知っておいてほしい

②対象授業（社会／自立活動）での検討
～社会Bグループ～

（3）身近な地域の危険な場所をまとめ、発表する



まとめ作業は紙媒体で行った

ここまでで学習した内容を使って
「ここは土砂災害で危ない」
などまとめることができた

②対象授業（社会／自立活動）での検討
～社会Bグループ～

成果

ハザードマップを読み取ることができた

まとめて発表することができた

②対象授業（社会／自立活動）での検討
～社会Bグループ～

課題

考える時間が
十分でなかった

実態把握が
十分でなかった

全体を通してのまとめ

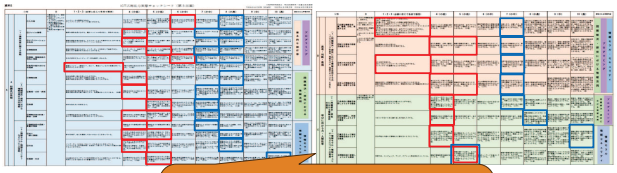
情報活用能力の中で…

情報手段を適切に
用いて情報を
得る力

得られた情報を
分かりやすく
発信・伝達する力

全体を通してのまとめ

ICT活用能力実態チェックシート



実践の中で整理が必要

ご清聴ありがとうございました

令和７年２月５日（水）
第３回全体研究会
高等部

寄宿舎研究テーマ

余暇の充実を目指して
～情報活用能力を生かした寄宿舎生活～

研究目標

（1）寄宿舎における情報活用能力とはどのようなものか整理する。

（2）整理した情報活用能力をもとに舎生の理解を深めながら指導方法を探る。

（3）余暇に関する情報を得たり、活用したりしながら過ごし方の幅を広げる。

研究方法

（1）寄宿舎における情報活用や余暇の過ごし方について各舎生の実態を整理する。

（2）整理した実態をもとに個別の課題をすり合わせ、指導方法を検討する。

（3）情報活用実践シートを使用しながら実践を行う。

寄宿舎における情報活用能力

基本的な操作	・ICT機器を使って情報を集める時に操作方法を知る必要がある
情報モラル 情報セキュリティ	・ICT機器を使う時には、インターネット上の危険性を知り、モラルを守って使う必要がある
収集	・ICT機器を使って天気予報・電車の遅延・活動内容などを調べる ・他舎生や指導員との対話や人が話しているのを聞いている
整理 保存	・今までの経験を思い返すことや調べたことをメモしている ・話し合いの時に出た意見をホワイトボードに書いている ・ホワイトボードに書いたものをカメラで撮って記録している ・活動後に感想文を書いている
発信 伝達 共有	・話し合いで自分の意見を伝える ・会話を通して情報共有している ・書いた感想文を発表している
比較 統計	・意見が分かれた時は多数決をとっている ・多数決の票数を計算して比べている
プログラミング	・何時にどこに行って何をするか、何を何人分用意するか考えている

情報活用と余暇の実態調査

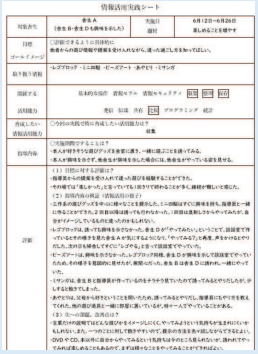
余暇の選択肢が多い舎生

・ICT機器や本、掲示物、会話などから情報を得ながら過ごしている。
・人が集まりやすい談話室で過ごすことが多い。
・会話していても情報量が多い。

余暇の選択肢が少ない舎生

・一人で過ごすことが多い。
・生活がパターン化されていて情報を得る機会が少ない。

情報活用実践シートを活用した一人一事例実践


情報活用実践シート

対象者名	舎生A （舎生B・舎生Dも興味を示した）	実施日 週行	6月12日～6月26日 楽しめることを増やす
目標 ゴールイメージ	【計画できるように目標的に 他者から の関係や情報を受けられながら、過ごし方 過ごしをを知ってほしい。		
取り組む活動	レゴブロック・三目棋・ビーズアート・あやとり・リサンガ		
関連する活用能力	基本的な操作　情報モラル　情報セキュリティ　収集　処理　発信 発信　保存　共有　活用　グループエンジン　構築		
育成したい情報活用能力	①今回の実践で特に育成したい活用能力は？ 収集		
指導内容	【実施回数で学ぶことは？ ・本人が好きそうな遊びグッズを舎室に置き、一緒に遊ぶことを誘っている。 ・本人が興味を示さず、他舎生が興味を示した場合には、他舎生がやっている姿を見せる。		
評価	（1）目標に対する評価は？ ・指導者からの提案を受けられて過ごし方選びを経験することができた。 ・その場では「楽しかった」と言っていても1回きりで終わることが多く、継続が難しいと感じた。 （2）指導内容の検証（活用法用の様子） ・三目並べの遊びグッズを中心に様々なことを提示した。三目棋はすぐに興味を持ち、指導員と一緒に作ることができた。2回目の時は誘っても行かなかった。1回目は意外しかからやってみたが、自分がイメージしているものに達っ方がみもしれない。 ・レゴブロックは、誘っても興味を示さなかった。舎生Dが「やってみたい」ということで、設置室で待っていたなその様子を見た舎生Aが気にするようになり、「やってみる？」と声掛、声をかけるとやり出した。次の日も継続してやりたいとのことなので、土日って設置室でやっていた。 ・ビーズアートは、興味を示さなかった。レゴブロック同様、舎生Dが興味を示して設置室でやっていたため、その様子を電話的に見せたが、無関心だった。舎生Bは舎生Dに誘われ、一緒にやっていた。 ・リサンガは、舎生Bと指導員が作っているのをチラチラ見ていたので誘ってみるとやり出したが、少しすると飽きてしまった。 ・あやとりは、父母から持ちていることを聞いたため、誘ってみるとやり出し、指導員にもやり方を教えてくれた。他の遊び道具と一緒に教室に置いているが、様々一人でやっていることがある。 （3）次への課題、改善点は？ ・音楽だけの活用ではどんな遊びかをイメージしにくく、やってみようという気持ちが生まれにくいかもしれない。また、一つのことに対して飽きやすいので、遊びの方法を色々紹介しながらできるとよい。 ・DVD や CD、本以外に自分からやってみようという気持ちはあるのだと感じられたが、誘われてやってみれば楽しめることもあるので、まずは様々なことをやってみることができてきればよい。		

目標

情報に関すること

指導内容
評価

明記

・どのような情報を扱うのか
・関係する情報活用能力は何か
・はぐくみたい情報活用能力は何か

挙げられた事例

・余暇グッズを知る
・かすみそうの芽を調べる
・楽しめることを増やす
・舎内を季節に彩る
・余暇の過ごし方を選択する
・推活について学ぶ
・イオンモールの行き方を調べる

舎生名	課題となる情報活用能力	課題内容
舎生A	収集	・興味関心の幅が狭く、過ごし方の選択肢が少ない ・自室で過ごすことが多く、他舎生とのかかわりが少ない
舎生B	収集 保存 伝達	・苦手意識や面倒という気持ちから調べることを避ける ・情報を留めておくことができない ・言葉を知らず、間違えて覚えていることが多い ・自分の想いを言葉にすることが難しい ・複数のことを同時に処理することが難しい
舎生C	共有	・自分の興味に特化していて情報収集に偏りがある ・指導員に対して話をすることが多く、他舎生とかかわることが少ない
舎生D	整理 伝達	・発信力に欠ける部分はあるが、余暇に関しては伝えることができる ・情報を正しく理解することができない時がある ・調べたことや自分の気持ちをまとめられず、伝えることが難しい
舎生E	収集	・自分の興味関心に特化していて情報収集に偏りがある ・興味関心の幅が狭く、過ごし方の選択肢が少ない
舎生F	収集	・自分から手を出す機会が増えて触ろうという意欲が見られ始めている

舎生A

実態

・興味関心の幅が狭い。
・余暇は自室でCDを聞いたり、DVDを見たりして過ごしている。
・自己中心的で他者の意見を受け入れることが苦手。
・自分から他者とかかわることは少なく、かかわりがあっても一方的で自己完結してしまう。
・買い物では自分の目的の物だけを買い、他の商品を見ようとしない。
・物事に飽きやすい性格だが、見通しをもたせることで最後まで参加できるようになってきている。
・視覚的な情報が入りやすい。

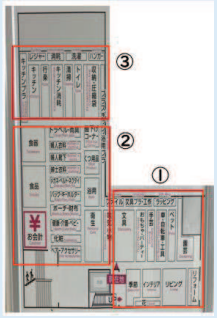
実践Ⅰ 『ダイソーでの買い物～余暇で使えるものを買おう～』

目標

興味関心を広げる
楽しめることを増やす

遊び道具を知るという観点から
「収集」する力を意識して実践

事前学習



フロアマップ

①案内看板

・全ての売り場を見る

・各エリアから一つ以上
楽しめそうな物を探す

②

③

買い物の様子

今までの買い物
即決して会計に向かっていた。

今回の実践
30分かけてすべての売り場を見て回ることができた。

途中で商品を変更する様子があった。

予算の中で取捨選択する経験ができた。

新しい遊びの情報を得ることに繋がった。

余暇の様子

指導員 「買った物で遊ぼうよ」

グライダーで遊ぶ

「楽しかった」と感じることができた

▼

他の舎生と一緒に遊ぶことはなかった

全員の買った物を舎内に掲示

「レゴブロックとカードゲームが楽しそう」

▼

経験することができなかった

意図的に他の舎生と遊ぶ機会を作る必要がある

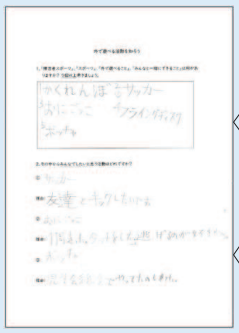
実践Ⅱ 『外で遊ぼう～鬼ごっこ・しっぽとりゲーム・野球～』

目標

外で遊べる活動を知る。
他舎生と遊ぶことを体験し、楽しさを感じる。

新しい遊びを知るという観点から
「収集」する力を意識して実践

事前学習



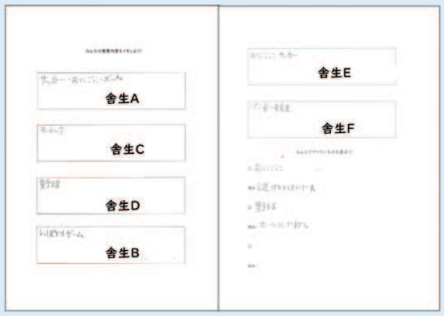
外で遊べる活動調べ

調べ学習のキーワード
・「外で遊べること」
・「障害者スポーツ」
・「みんなと一緒にできること」

調べた内容の中から
みんなでしたいと思ったこととその理由

他の舎生を意識した発言や学校の経験に基づく発言があった

プレゼン大会



プレゼン前

・サッカー
・鬼ごっこ
・ポッチャ

▼

プレゼン後

・鬼ごっこ
・野球

他の舎生の意見を聞く姿勢が見られた
意見を聞いて自分の考えを変えていた

活動の様子

経験した遊び

・鬼ごっこ
・しっぽとりゲーム
・野球

経験のない遊びを意識することができた
余暇を広げるきっかけを作ることができた

舎生A まとめ

・他者の意見に耳を傾け、興味のなかったことに意識を向けることができた。
・他の舎生と一緒に外で遊ぶことが楽しいと感じることができ、余暇を広げるきっかけになった。
・あいさつやお礼、配膳に行くときの声かけなど他者を意識した行動が増えた。
・不本意なことに対して受け入れられることの幅が広がった。

⇒他の舎生と遊ぶ機会や新しい遊びの場を意図的に作りながら経験を増やしていきたい。

舎生B

実態
・寄宿舎の環境や人に慣れはじめ、余暇は自室よりも談話室で過ごすことが多い。
・余暇の過ごし方の選択肢が少なく、同じことをしていることが多い。
・周りを見る力は高く、人の話をよく聞いていて相手の様子をうかがいながら気を配ることができる。
・言語力が低く、言葉を間違えて覚えていたり、話が断片的に入っていたりするなど正しく理解できていないことが多い。
・気持ちを伝えることや説明することが苦手である。

実践1 『ダイソーでの買い物～余暇で使えるものを買おう～』

目標

欲しいものを見つけて一人で買い物ができる。
自分の思いを伝える。

商品を見て欲しいものを見つけるという観点から「収集」、
気持ちを伝えることから「発信・伝達」を意識して実践

買い物の様子

予算1,000円

自分でお金の使い方を考えて買うことに

▼

経験が必要

夕食と遊び道具どちらに比重を置くべきなのか
予算の中でバランスを考えた使い方

買い物報告会

事前に買った理由を伝えるように話をしていたが…

買った物だけを言って終わろうとしていた。

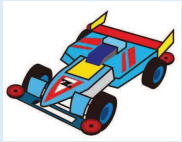
▼

指導員
「なんで買ったんですか？」

▼

「前に作ったことがあってまた作りたいと思ったから」
「時間がかかって買いました」

余暇の様子



ミニ四駆

カードゲーム

他の舎生や指導員を誘って遊んでいた

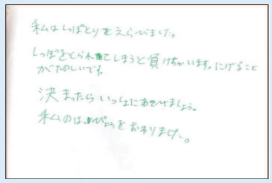
実践Ⅱ 『外で遊ぼう～鬼ごっこ・しっぽとりゲーム・野球～』

目標

自分の意見をまとめ、相手に伝える。

「基本的な操作・収集・整理・発信」する力
を意識して実践

事前指導



パワーポイント・メモ帳を活用することに

伝え方が
わからない

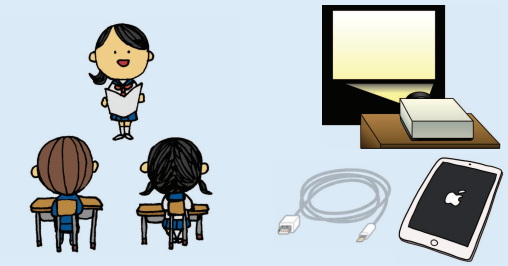
▼

指導員
「画像に言葉を付けたら？」
「何を伝えるかメモに書いたら？」

▼ アドバイスを受けて

自分の思いを整理できた

プレゼン大会



整理した情報をもとに自分の気持ちを伝えることができた
自己肯定感を高めることに繋がった

舎生B まとめ

・経験を重ねて自信がついた。
・自分から遊びに誘うようになった。
・他の舎生が遊んでいるのを見て「私もやりたい」と自発的な行動が増えた。
・寄宿舎に対して気持ちを出せる場であることに気付くことができた。
・自分の伝えたいことを言葉にできないこともあるが、伝えることに対して途中で諦めることが減った。

⇒安心できる場であることがわかると積極的な様子が見られている。
⇒気持ちに寄り添い、自信がつけられるようなかかわり方をしていきたい。

寄宿舎研究のまとめ

余暇について

・遊びの情報を得ながら余暇の過ごし方の幅を広げるきっかけを作ることができた。
・集団で遊ぶことの楽しさを感じさせることができた。

・まだ経験が浅く、過ごし方の手段が少ない。
・周囲の人を誘うことに対して抵抗感がある。

⇒様々な情報や話題を触れさせる。
⇒舎生同士のやりとりや舎生の主体的な場面を見逃さない。

寄宿舎研究のまとめ

情報活用能力について

・調べた情報をもとに自分の考えをまとめ、伝える機会を作ったことで情報活用能力を活用することにつながった。

・調べたり、考えたりしながら「やってみたい」と思い、その気持ちを発信できる環境づくりが必要である。
・発信があった時に経験できる場を作る必要がある。
・経験の積み重ねによって余暇の幅を広げられる可能性がある。

⇒舎生の何気ない言動を見逃さないようにする。

「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」

今年度の校内研究のまとめと来年度に向けて

研究主題（R６・７年度）
「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」
研究方法

これまでの授業実践の蓄積 × ICT利活用に限らない「情報」の活用 ＝ ねらいを達成するための学習効果の最大化

ICT活用から情報活用能力育成へと視点をシフトチェンジ

研究主題（R６・７年度）
「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」
小学部　研究実践

「小学部段階における情報活用能力とは何か」「その指導の際に大切にしたいことは何か」を考えてきた。

・情報活用能力をとらえていく中で低学年と高学年の違いが顕著に出た。

・指導上大切にしたいことが①環境設定をすること（情報を得たり、発信したりしやすい環境を意図的に設定する）、②得た情報を伝える場面をつくること、言葉の力をつけること（語彙を増やす等）、③体験や経験を大切にすること（それを伴った身のある言葉をもつこと）、④興味のあることを入り口に、やりとりを広げていくこと（人との関わりの基盤づくり）の４点であること

研究主題（R６・７年度）
「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」
中学部　研究実践

情報機器をどのように活用すると課題としている個の目標に迫っていけるのかについて考えてきた

・特に「自分の知識（言語）を使い、他者へ発信する力」について成長が見られた。

・情報機器のみではなく身振り、筆談などの発信方法を教師とのやり取りの中で使いながらその良さ（より伝わりやすいと感じる）を知ることで様々な方法で伝えようとする様子が見られ始めている。

・「発信方法の選択肢を設定すること」さらに「発信する場面に応じ臨機応変に発信方法を選び、使っていく力を生徒につけさせること」が必要。

研究主題（R６・７年度）
「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」
高等部　研究実践

本校卒業までのどのような情報活用能力を身につけておく必要があるか検討・整理を行った。

・取り組みの中で情報の受け取り方や情報を相手に伝える方法についてそれぞれグループの実態に応じた支援や手立てを検討することができた。

・どのような手立てで学習を進めることで身につけさせたい情報活用能力の育成を図ることができるかについて、社会／自立活動の学習で有効な手立てを検討することができた。

・どの実態の生徒についても、学習の中では特に情報をどのように受け取るか、相手に伝えるかの力が重要であることが各グループで検討。生徒の情報活用能力の実態について、丁寧に読み取ることとともに、実態に応じた適切な手立てを設定する必要性についての確認。

研究主題（R６・７年度）
「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」
寄宿舎　研究実践

「余暇の充実」について情報活用能力を生かした寄宿舎生活を過ごしていけるように考えていった。

・情報活用実践シートを通して様々な場面で情報活用能力（基本的な操作・情報モラル・情報セキュリティ・収集・整理・保存・発信・伝達・共有・比較・プログラミング・統計）が複雑に関係し合っていることが分かった。

・情報活用の幅が広く、情報活用能力が関連し合っていることから難しさを感じたが、各実践で関係する情報活用能力と、育みたい情報活用能力を明記してどこに注目するのかポイントを絞って取り組んだことで指導員の情報を活用することに対する意識が高まり、どの情報活用能力に対してどのようにアプローチするのかを見失わずに指導することができた。

・指導員間で何をねらうのか、どのような支援や手立てを行うかを共通確認しながら丁寧に指導を行うことができた。

研究主題（R６・７年度）
「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」
研究　成果

体験的な学習の重要性

どの情報活用能力を身につけさせるか見極めていくこと

「情報」とは学習環境すべてから得られるものであり、意図した環境設定が重要

研究主題（R６・７年度）
「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」
研究　課題

情報活用能力を含めた丁寧な実態把握

実践についての見取りの評価

研究主題（R６・７年度）
「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」
来年度に向けて

情報活用能力育成の視点をもちながらの
授業づくり

どの力を育成したいか → 必要なスキルの可視化

学習のねらいを達成するための情報活用能力育成

研究主題（R６・７年度）
「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」
来年度に向けて

特別支援教育におけるICT活用の視点

視点１
教科指導の効果を高めたり、情報活用能力の育成を図ったりするために、ICTを活用する視点

- 教科等又は教科等横断的な視点に立った資質・能力であり、**障害の有無や学校種を超えた共通の視点**。
- 各教科等の授業において、**他の児童生徒と同様に実施**。

視点２
障害による学習上又は生活上の困難さを改善・克服するために、ICTを活用する視点

- **自立活動**の視点であり、特別な支援が必要な児童生徒に特化した視点。

各教科及び自立活動の授業において、**個々の実態等に応じて実施**。

✓ 新特別支援学校学習指導要領では

各教科の指導計画の作成に当たっての配慮事項として、**各障害種ごとにコンピュータ等のＩＣＴの活用に関する規定**を示し、指導方法の工夫を行うことや、指導の効果を高めることを求めている。

研究主題（R６・７年度）
「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」
来年度に向けて

想定される学習内容	例
基本的な操作等	キーボード入力やインターネット上の情報の閲覧など、基本的な操作の習得等に関するもの　等
問題解決・探究における情報活用	問題を[illegible]し、解[illegible]る情報[illegible]
プログラミング（本事業では、問題解決・探究における情報活用の一部として整理）	単純な[illegible]どのよ[illegible]処理するかといった道筋を立て、実践しようとするもの　等
情報モラル・情報セキュリティ	SNS、ブログ等、相互通信を伴う情報手段に関する知識及び技能を身に付けるものや情報を多角的・多面的に捉えたり、複数の情報を基に自分の考えを深めたりするもの　等

これらの内容をどの学習場面の中で扱うかについて検討が必要

研究主題（R６・７年度）
「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」
来年度に向けて

「情報活用能力ベーシック（日本教育情報化振興会2021）」
学習のプロセスに沿った情報活用能力育成の場面を考えていく手がかりになる

研究主題（R６・７年度）

「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」
来年度に向けて

どのスキルをどの学習プロセスにて身に付けさせていくか考え、手立ての検証と実践を行う。

令和７年度　小学部
研究報告

令和８年２月

研究テーマ

「小学部段階における
情報活用能力を育成する
指導場面の検討」

・1学期には、前年度の成果を振り返りつつ、座談会形式のディスカッションを通じて「ICT活用の困難さ」や「授業構成の妥当性」について活発な意見交換を行った。

・中・高学年グループでは実態差に応じた個別最適なICT活用の在り方を、低学年グループでは注視を促す環境構成の検討を重点的に行い、各グループでの良い事例を随時シェアすることで学部全体の指導力向上を図った。

・夏季休業中には、教材提示サイト「TeachU」の紹介や「Padlet」「KOMA KOMA」等のアプリ体験を実施し、具体的な指導ツールとしての選択肢を広げた。

・学習会を通して、平成29年告示の学習指導要領において「情報活用能力」が学習の基盤となる資質・能力と位置付けられた歴史的背景を再確認した。これにより、ICT活用は単なるツールの導入ではなく、「情報活用能力」を育むための手段であるという、本研究の根幹となる認識を再認識した。

2学期以降の研究のイメージ

・目指す姿、目的となる行動を明確にする。→今後扱う単元で検討していく

・児童のどんな姿（例えば、発表する場面での声の大きさや状況、内容、かかった時間など）が見られたら達成なのか検討する。

・AARサイクル（Anticipation,Action,Reflection）で行っていく。

中・高学年　研究報告

①どういう前提で話がはじまったか

・「情報活用能力」

→本質的にはICT活用がどうのという話ではないよね

とはいえ、

・情報活用能力が重要視される背景（社会の様子とか）を考えると、ICT機器の使用は前提ではある

①どういう前提で話がはじまったか

また、今年度の研究のまとめとしては、小学部段階における情報活用能力として、ICT 機器を
することは多く挙がってこなかった。しかし、ICT 機器の利活用について、小学部段階での活用
方法については、課題が残ることとなった。中、高等部での「学習をより効果的にするための
機器の利活用」に向けて、小学部でどのような力を基礎として培っておくべきか、ICT 機器を情
報手段として活用できるためには、どのような支援・指導をしていくべきか検討をしていくこと
がある。

↑去年の課題として挙がっていたもの

ICT機器を情報手段として活用できるようになるために
どんなことをしたらいいでしょうね？
→それを考えようじゃない

②何をしたのか、どうだったのか

- 生活の授業でICTつかってみよう
- 単元名「ふゆやさいを そだてよう」
- 対象児童　A、B

②何をしたのか、どうだったのか

【児童Aの場合】
- 彼の情報活用能力育成、といわれて　やりたいこと

→「見通しをもって、わかって活動にのぞむこと」

・いろんな場面で、このためにいろんな手立てや本児が見通しをもてる活動を用意している
ICTをつかえないか？

②何をしたのか、どうだったのか

【児童A】なにをしたのか

←クリックをすると
「だいこん」と
発声できる

この仕組みをつくり、教員とやりとりしながら、
活動に見通しをもってたのしく活動した

②何をしたのか、どうだったのか

【児童Aの場合】どうだったのか

・注視するべきもの、操作するべきものが手元にくる

→関心が向きやすい、持続しやすい

・他の場面でもこういった活動に取り組む

→この形の活動に慣れる、ちょっと高度なことも？

→見通せる活動の幅も広がっていけば・・・

→いろんな社会活動や余暇にもつながる　かも

②何をしたのか、どうだったのか

【児童Bの場合】

・彼の情報活用能力育成、といわれて　生活科でやりたいこと

→「調べる手段を選択し、調べたことを活用し問題を解決しようとする」

②何をしたのか、どうだったのか

【児童Bの場合】なにをしたのか

- 冬野菜についてiPadで調べる
- 調べたことをクイズにする
- みんなに出題する

「情報活用能力育成のプロセス」を踏みつつ、ICTも活用した

・検索エンジンでの検索は範囲が広いのでサイトを限定した

→情報量の調整を配慮する（ICTに限らず、図鑑で調べるときも）

②何をしたのか、どうだったのか

【児童Bの場合】どうだったのか
・調べる手段にタブレットを選んだ（１学期は図鑑を選んだ）
→手段の拡大
・画像で調べる
→文章だとわからなくても　これなら！（”合理的配慮”的）
・気づいたことを教員に伝える姿もみられた
→情報活用能力が育成されるプロセス「整理・分析」に該当

→→収集した情報をもとに、適切に表現する、という経験を重ねたい

②何をしたのか、どうだったのか

【話し合った】（他の児童の様子も含め）
Ex.児童A　取り組みは朝の会からの派生
Ex.児童B　取り組みの一部は集団国算からの派生
Ex.その他の児童　タブレット端末を用いた文字入力

→ある場面で取り組んでいることが、他の場面で活きる

③つまり何

・積み重ねるのが大事
・教科横断的な取り組み、いろんな場面との連携が大事
→学習の基盤となる能力
特別に意識することではなく、当然のように意識すること？

・教員間での連携が大事

①どういう前提で話がはじまったか

また、今年度の研究のまとめとしては、小学部段階における情報活用能力として、ICT 機器
することは多く挙がってこなかった。しかし、ICT 機器の利活用について、小学部段階での活
方法については、課題が残ることとなった。中、高等部での「学習をより効果的にするための
機器の利活用」に向けて、小学部でどのような力を基礎として培っておくべきか、ICT 機器
報手段」として活用できるためには、どのような支援・指導をしていくべきか検討をしていく
がある。

↑去年の課題として挙がっていたもの

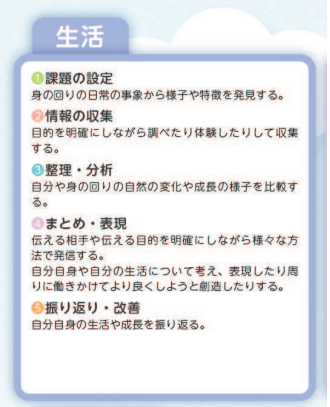
ICT機器を情報手段として活用できるようになるために
どんなことをしたらいいでしょうね？
→それを考えようじゃない

③つまり何

ICT機器を情報手段として活用できるようになるために
どんなことをしたらいいでしょうね？

→教員間で情報共有しながら、いろいろな場面と連携させたり、教科横断的に取り組んだりしながら、積み重ねる

低学年グループ　研究報告



生活

❶課題の設定
身の回りの日常の事象から様子や特徴を発見する。

❷情報の収集
目的を明確にしながら調べたり体験したりして収集する。

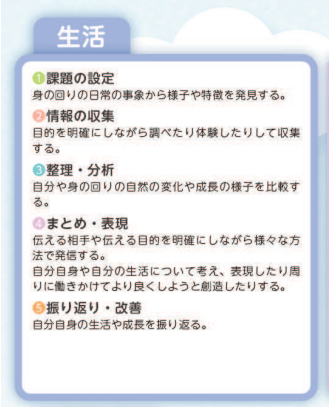
❸整理・分析
自分や身の回りの自然の変化や成長の様子を比較する。

❹まとめ・表現
伝える相手や伝える目的を明確にしながら様々な方法で発信する。
自分自身や自分の生活について考え、表現したり周りに働きかけてより良くしようと創造したりする。

❺振り返り・改善
自分自身の生活や成長を振り返る。

・1学期は主に、低学年の児童にとっての情報の収集について検証、実践した。

・情報活用能力ベーシック①と②の段階までの検証で終わっている。→③以降については2学期に研究で取り組んだ。



生活

❶課題の設定
身の回りの日常の事象から様子や特徴を発見する。

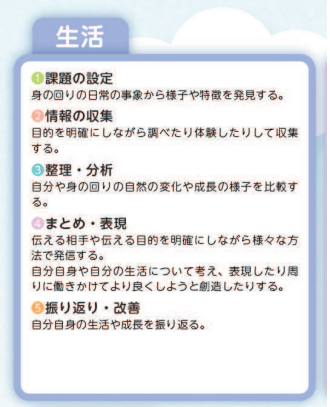
❷情報の収集
目的を明確にしながら調べたり体験したりして収集する。

❸整理・分析
自分や身の回りの自然の変化や成長の様子を比較する。

❹まとめ・表現
伝える相手や伝える目的を明確にしながら様々な方法で発信する。
自分自身や自分の生活について考え、表現したり周りに働きかけてより良くしようと創造したりする。

❺振り返り・改善
自分自身の生活や成長を振り返る。

③小学部の低学年の児童が自分で行うのは難しい。
↓
・教員側で自然の変化を分かりやすくワークシートやスライドにまとめて示す。
・実体験を伴う活動を行う、変化が分かりやすい題材を扱うことなどで、変化や成長を引き出す。



生活

①課題の設定
身の回りの日常の事象から様子や特徴を発見する。

②情報の収集
目的を明確にしながら調べたり体験したりして収集する。

③整理・分析
自分や身の回りの自然の変化や成長の様子を比較する。

④まとめ・表現
伝える相手や伝える目的を明確にしながら様々な方法で発信する。
自分自身や自分の生活について考え、表現したり周りに働きかけてより良くしようと創造したりする。

⑤振り返り・改善
自分自身の生活や成長を振り返る。

④児童からの‘アウトプット（表出）’を最も大切にしたい。

↓

伝えたい内容を明確にする。思いや意図が伝わるような適切な語句や表現を工夫して伝える。

↓

「絵本遊び」に焦点を絞り、AARサイクルで検証を行った。

・Anticipation（見通し）

「絵本遊び」における実態と、それぞれの児童の目指す姿・目標を明確化

児童名	実態と課題	「絵本遊び」の単元での目指す姿・目標
C 1年	経験が少なく自分からの表出が少ない	様々な経験をすることでできることを増やす、友達や教師と多く関わることで自分からの表出を増やしたい
D 1年	模倣が上手、活動を拒否することもあるが切り替えも早い	教師を介して友達と関わる経験を増やし、良い行動が模倣できるとよい
E 2年	一斉指示が分かりづらく前の画面に注目しづらい	自分の役割に合った動きをする、簡単な因果関係が分かるとよい
F 2年	好奇心が旺盛だが、場にそぐわない行動をすることがある、CTに注目できる	読んだ本の中から好きな本を選ぶ、どんなキャラクターが出てきたかが分かる
G 2年	自分のペースでやりたがり、周りの友達に合わせられないことがある	遊びのルールが分かり、友達に呼びかけをしたり、せりふを覚えたりする
H 2年	理解力は高いが、やりとりが成立しにくい	国語とタイアップしながら学習を進め、語彙力を身に付けたり話の内容を理解したりする
I 2年	理解力は高いが、友達と活動を共有できないことがある	友達と触れ合ったり、本の遊びを実際にみんなでやって楽しんだりする経験をする
J 2年	自閉的傾向が強いが、関心がもてたら見て活動ができる	友達を意識して遊ぶ、遊びの中で主体性が出るとよい

・Anticipation（見通し）

CTより

・実際に本に出てくる遊びをやってみる！
・動きのある遊びはどうかな？
・はじめは対教師、次に教師を介して児童同士の関わり、最後は児童同士、と関わり方を広げていくのはどう？

STより

・単純で分かりやすい話がよいのでは
・台詞をみんなで言ってみる
・本によってはスライドが分かりやすい。ふきだしを入れてみたらどう？
・読み聞かせに参加させる（歌やせりふ）

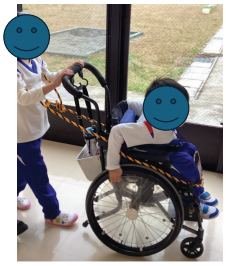
・Action（行動・表現）

・絵本『パンダくんのおにぎり』では、転がっていったおにぎりをみんなで探す、という設定で別室におにぎりの模型を複数隠し、「宝探し」のような感覚で楽しんでおにぎりを探せるよう、場を設定した。

・おにぎりを見つけづらい児童は、別室で分かりやすい状況で探したり、順番を前にして少人数で探したりするなど、個に応じた配慮を行った。

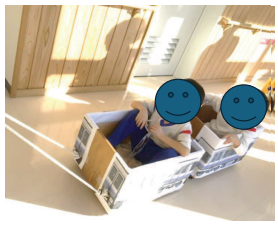
・おにぎりをムーブメントスカーフにくるみ、そのスカーフがヒントになるように隠したり、最後の授業ではおにぎりの中におやつを入れ、みんなで食べたりする経験もした。

・Action（行動・表現）　1回目（電車ごっこ）



・「でんしゃ、はっしゃしまーす」という絵本を読み、実際に電車ごっこをして遊んだ。
・初回は、二人一組になり、紐やフラフープを用いて電車ごっこをした。

・Action（行動・表現）　3回目（電車ごっこ）



・単元の後半では児童が実際に乗れるキャスターがついた箱電車を用意した。
・児童は、箱電車の登場でより期待感をもちながら電車を待ったり、どの車両に乗ろうか考えたり、友達と一緒に遊ぶ経験を積むことができた。

・Action（行動・表現）

ふきだしの活用

自分がどの登場人物になるかを選ぶ

・『でんしゃはっしゃしまーす』では、紙芝居とスライドの両方用意をしたが、教室を暗くすること、見やすい高さのホワイトボードに投影すること、絵本のイラストにふきだしの効果を入れることなどの工夫をすることで、児童にとって情報が活用でき注目しやすいことが分かった。

・Reflection（振り返り）

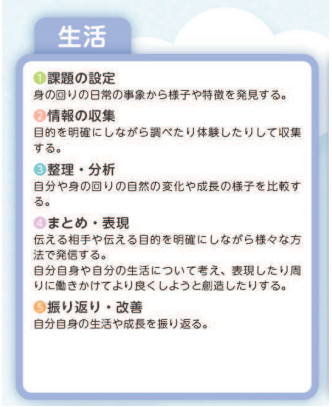
CTより

・実際にやってみたら、「でんしゃはっしゃしまーす」はひも電車ではなく、キャスターのついた箱電車の方が児童は楽しそうだった
・授業のはじめに「どの本を見たいか」と、最後に「どれが楽しかったか」を聞いてみる

STより

・ふきだしを使ってせりふを促せた
・「せりふを言ってから乗る」ということがどの児童もできていた
・読み聞かせに参加させることで、前に意識を向けることができていた

児童名	「絵本遊び」の単元での目指す姿・目標	評価
C 1年	様々な経験をすることでできることを増やす、友達や教師と多くかかわることで自分からの表出を増やす	絵本遊びを通して、教師だけではなく友達を意識している様子が見られた。自分から「やりたい」気持ちを表情等で表現できた。今後の単元も実体験を大切にしながら、様々な活動に挑戦させたい。
D 1年	教師を介して友達とかかわる経験を増やし、良い行動が模倣できるとよい	教師からの問いかけに自ら手を挙げて意欲的に参加した。ふれあい遊びでは、他の児童のかかわりを受け入れ、教師の模倣をして友達をくすぐったり優しく押したりできた。友達や示範への賞賛を他のSTが行うことで、良い行動に注目しやすくなり（インプット）、模倣（表出）につながるのではないか。
E 2年	自分の役割に合った動きをする、簡単な因果関係が分かるとよい	「あぶくたった」では、手をつないだり、座ってくすぐられるのを待ったりできた。電車ごっこでは、待つと乗れることが分かり期待感をもてた。インプットの時間はCTの声やイラスト、写真に注目して自ら情報を得ようとしたり、動きによる示範にも注目したりすることができるよう、見守りを行う等情報の収集の妨げになるような刺激を与えない環境設定を検討したい。
F 2年	読んだ本の中から好きな本を選ぶ、どんなキャラクターが出てきたかが分かる	読んだ本に興味をもっている様子だったが本を選ぶのは難しかった。登場人物の動物やキャラクターをよく見ていた。登場人物の動物やキャラクターのカードなどを準備しておくことで表出につながる。読み聞かせの回数を増やすことで好きな本を選んだり、登場人物を理解したりできると考えられる。
G 2年	遊びのルールが分かり、友達に呼びかけをしたり、せりふを覚えたりする	絵本に注目し、教師の読み聞かせを聞けた。電車ごっこでは、促されると「乗せて」と覚えたせりふを伝えることができた。回数を重ねると自分から言うことができたかもしれない。友達の動きに合わせたり、活動を待ったりできるとよい。
H 2年	国語とタイアップしながら学習を進め、語彙力を身に付けたり話の内容を理解したりする	絵本遊びで読んだ本を国語でも興味をもって読むことができた。本の中で繰り返し使われるフレーズを自分から発言するなど、話の内容に関心をもち理解もできていた。人数が多いと刺激になるので、2～3人の少人数で絵本遊びをし、スモールステップで取り組んでいくのもよい。
I 2年	友達と触れ合ったり、本の遊びをみんなでやって楽しんだりする経験をする	まわりの様子は見ていても車いすでの活動なので友達とのふれあいには課題があった。絵本には関心がもて、内容の理解もできるが、遊びの中で楽しさを感じているかどうかは評価しづらい。生活の授業が楽しいと感じる授業を今後も検討していく。
J 2年	友達を意識して遊ぶ、遊びの中で主体性が出るとよい	友達を意識することは難しかった。電車ごっこでは、教師と一緒に「乗せて」と伝えることができた。自分からすすんで乗ろうとしたり、野いちごのしげみに手を伸ばすなど、主体的に取り組めていた。集団ではなく、友達と1対1で遊ぶことから始めるとよい。



⑤児童が自分で行うのは難しい

↓

本時の終わりに児童の成長をほめる、前回の学習の写真や動画を見せる、タブレットでその日の振り返りを行う

↓

自分の学習や成長を振り返るきっかけとなる

認知力の高い児童は振り返りワークシートなどに取り組む

- 💡 小学部　研究の成果
  - 実体験の重視：ICTは有効なツールだが、五感を使った「実体験」こそが情報活用の基盤であると再認識した。
  - 環境設定：児童が情報を得やすいよう、提示方法（画面の高さ、音声、アプリの選定）を工夫することが不可欠である。
  - 系統性：「情報活用能力ベーシック」を参考にしつつ、特別支援教育に合わせた柔軟な読み替えや支援の段階化が有効であった。

- ⚠️ 今後の課題
  - 特別支援学校における先行研究や文献が少なく、独自に評価指標を模索し続ける必要がある。
  - 教員側のICTスキルを向上させ、継続して効果的な活用事例を共有できる体制づくりをしていく。

中学部研究

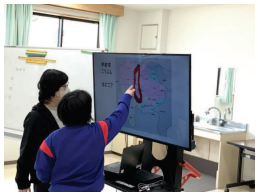
令和８年２月３日
第３回全体研究会（実践報告会）

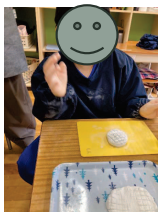
研究テーマ

「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」

～課題解決に向けた「整理・分析」「まとめ・表現」の学習プロセスに着目して～

今年度の研究について





昨年度の課題：情報機器活用の有効性と、教師による見取りの視点の必要性。
今年度の視点：あえて「ICTを使うこと」を目的化せず、自然な形での「情報活用能力（アウトプット）」の育成を目指す。

今年度の対象授業

(2)中学部

①知的障害

	月	火	水	木	金
登校					
1	日常生活の指導				
	自立活動	朝の体育			
2	国語	数学	国語	数学	国語
3	特別活動	保健体育	社会/理科・社会	保健体育	理科/自立活動
4	日常生活の指導				
昼休み	日常生活の指導				
	昼休み				
5	総合的な学習の時間	美術	自立活動 日常生活の指導	職業・家庭	音楽
6	日常生活の指導			日常生活の指導	
下校					

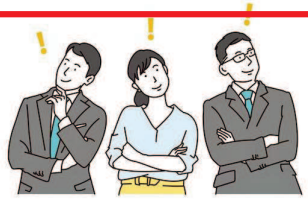
重度知的障害の生徒にとっての理科社会について課題と成果を整理する。

今年度の対象グループ

理科・社会Aグループ
男子３名（中２・中３）
女子１名（中２）
実態： 周囲の変化に気づきやすく、音への反応が良い。一方で、発信に課題があり、理解度を把握しにくい。

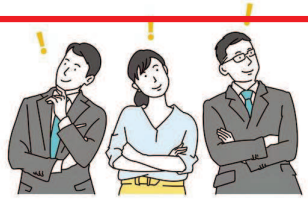
指導上の留意点

環境設定
CTの話で行動に移せるように（STの役割）
授業へ向かう力の向上
自分から表現してほしい
発展的に繰り返すことで定着させる



目標

授業で得た情報を自分なりに整理し、他者へ伝える（アウトプットする）力を育てる。



実践事例
社会科「身近な地域を知ろう」
単元名： 地域の祭（八朔祭、牛倉神社例大祭、かがり火祭）
目標： 地域の行事に興味を持ち、特色に合わせて体を動かしたり道具を選んだりする。
構成： 5時間構成（各市の祭りを体験し、最後に振り返りを行う）。

授業づくりの工夫（インプットの最適化）

教材の工夫：
全体提示と「目の前」提示の併用。
抽象的な絵ではなく、実際の道具の「写真」を使用。

言語の精選：
「おまつり」「ししまい」など、ターゲットとする言葉を絞って繰り返し提示。

授業づくりの工夫（プロセスの固定化）

固定された流れ
「導入 → 活動 → 振り返り」

順番の配慮
模範となる生徒（または教師）が先に動くのを見てから活動することで、見通しをもたせる。

インプット
教材の精選（実物写真）、ターゲットワード（おまつり、ししまい）の絞り込み。

↓

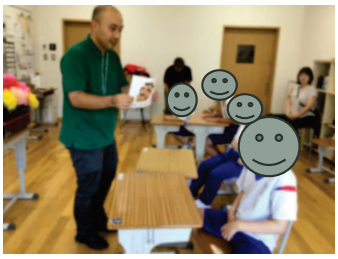
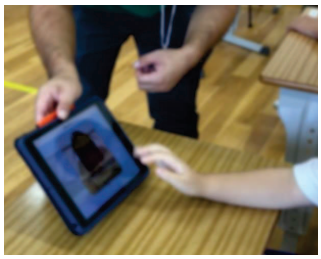
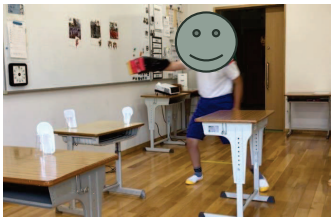
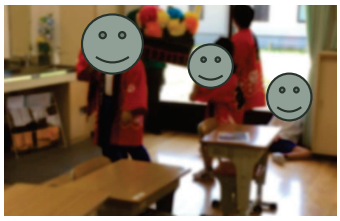
プロセス
友達のモデル提示（示範）、授業展開の固定、繰り返しの学習。

↓

アウトプット
2択からの選択、身体表現（わっしょい！）、自分なりに表現。

↓

見取り（評価）
複数教員による多角的な評価、日常生活への般化。

生徒の変容と評価（アウトプットの姿）

生徒A・B

教師の支援を段階的に減らすことで、一人で活動できる場面が増加。

生徒C・D：

写真と「友達の住んでいる地域」を結びつけて理解し、正しい写真を選択・発話して表現。

生徒の変容と評価（アウトプットの姿）

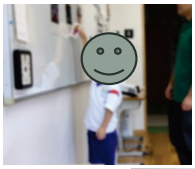
共通の成果

状況を理解し、自分なりの方法（動作・選択・言葉）で表現する姿が見られた。

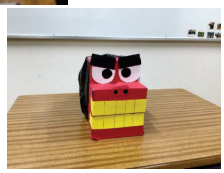
研究の成果

①提示場所の工夫

（全体提示と手元提示の併用）



② 具体的・視認性の高い教材提示



研究の成果

③集団の良さを生かした提示順の配慮

④言葉の精選と反復提示

⑤ 授業展開の固定化と単元設定の長期化

研究の課題

①ねらいのさらなる細分化
（例：現象だけでなく言葉との結びつき）

②他教科や生活場面への般化
（多角的な実態把握）

研究の課題

今後も「インプットの最適化」と「アウトプットの場」の設定を軸に、より良い授業づくりに努める。

ご静聴ありがとうございました

高等部学部研究報告

令和８年２月５日（木）
第２回全体研究会

高等部研究テーマ（Ｒ６年度設定）

卒業までに身に付けさせたい
情報活用能力の整理

昨年度の研究の概要

（1）高等部の生徒に卒業までに身に付けさせたい情報活用能力とは何か

（2）身に付けさせたい情報活用能力を育成するために大切にすることは何か

（3）実際の授業場面でどのように育成をはかるか

研究過程

①身に付けさせたい情報活用能力の検討

生徒を療育手帳の区分をもとに4つのグループにわけ、グループごとに身に付けさせたい情報活用能力を検討した。

「ICT活用能力チェックシート」や「情報活用能力ベーシック」を用いて検討した。

研究過程

②対象授業での検討

対象授業を「社会／自立活動」とした。

➡ 調べ学習や学習した内容の発表や共有など情報活用能力の育成をねらう場面の設定がしやすい。

研究過程

③1年次のまとめ

ICT機器よりも感覚的な刺激から情報を得る

自らICT機器を活用して情報を得る

ICT機器を活用し周囲の支援を受けて情報を得る

研究過程

③1年次のまとめ

様々な情報手段を適切に用いて情報を得る力

得られた情報をわかりやすく発信・伝達する力

研究過程

④次年度に向けて

様々な情報手段を適切に用いて情報を得る力 ⇔ 得られた情報をわかりやすく発信・伝達する力

高等部の生徒に卒業までに身に付けさせたい情報活用能力とは

今年度の研究の概要

- やまびこ支援学校　高等部としての指標の作成
- 授業での見とり方・活用方法の検討
- 実践とブラッシュアップ

研究方法　研究のグループについて

重度

単元配列表

軽度　軽度

研究方法

様々な情報手段を適切に用いて情報を得る力

着目

まとめた情報をわかりやすく発信・伝達する力

得た情報をまとめたり、精選する力

研究方法

多くの授業で検証 → 各個人の感想・意見・実践

現場実習の報告書の作成 → 同じフォーマットでの検証・実践

指標のブラッシュアップ

情報活用能力 Ver.1

重度

伝達

表情や身振りで伝える
情報を見て行動にうつす
収集した情報を言葉やイラストで伝える

整理・選択

求められたものを選ぶ　簡単な2択を見比べる
好きなものを選ぶ　情報を聞いて何かわかる
関連したものをまとめる

収集

人の行動を見て何しているかわかる
周囲にあるものがわかる　外的刺激を受け入れる
文字や音、絵やイラストから情報を得る

情報活用能力 Ver.2

文言の整理

伝達

表情や身振りで伝える
情報を見て行動にうつす
収集した情報を言葉で伝える

整理

求められたものを選ぶ　簡単な2択を見比べる
好きなものを選ぶ　情報を聞いて何かわかる

収集

人の行動を見て何しているかわかる　周囲にあるものがわかる
文字や音、絵やイラストから情報を得る　外的刺激を受け入れる

情報活用能力 Ver.3

項目の整理

伝える

表情や身振りで伝える
情報を見て行動にうつす
得た情報について言葉で伝える

選ぶ・見比べる

求められたものを選ぶ　簡単な2択を見比べる
好きなものを選ぶ　情報を聞いて何かわかる

得る

人の行動を見て何しているかわかる　周囲にあるものがわかる
文字や音、絵やイラストから情報を得る　外的刺激を受け入れる

	収集	整理・選択	発信
個別 国数自立	教材 今日の予定 写真を見る 好きなものを検索 問いかけの内容を理解	順番の選択 提示物を見比べる やりたいことを選択 （自主的に） 提示されたものの中から選択	つかむ 注視 表情で答える 表情・身振りで発信 選んだものを伝える 書く
集団 理社美音体 家道特外	スライドから読み取る 地図・グラフから読み取る 全体説明で知る、わかる 見本・完成物からイメージする やることがわかり、検索 友達の動き、教師の動きから感じる 語彙の豊かさを高めることが収集・発信につながる ポイントを注視する 環境（音、他者の存在など）に五感で気が付く 端末で調べ学習 やるべきことが分かる 出た意見を収集	どこに何を記入するかわかる 検索した情報からやりたいこと、作りたいことを選ぶ いくつかのパターンの中から選択させる 五感で気が付いたものを選ぶ	調べたもの、まとめたものを発表する 集団活動を楽しむ 実際の行為を録画して伝える しぐさ、声 内言語がある生徒にはボイス機能アプリ
総合		項目ごと整理 自分の好みを選ぶ	資料にまとめる 自分のやったこと、やり方を伝える
職Ⅰ 職Ⅱ	手順表から内容を理解する	時間内で取り組む	終わりやできたを伝える

情報活用能力 / 教科等	得る	選ぶ・見比べる	伝える
個別 国数自立	予定表から一日の流れがわかる 教科に合わせた持ち物がわかる 写真を見る 好きなものを検索する 問いかけの内容がわかる	順番の選択する 提示物を見比べる やりたいことを選択する 提示されたものの中から選択する	つかむ 注視する 表情で答える 表情・身振りで伝える 選んだものを伝える 書く
集団 理社美音体 家道特外	スライドから読み取る 地図・グラフから読み取る 全体説明で知る、わかる 見本・完成物からイメージする やることがわかり、検索する 友達の動き、教師の動きから感じる ポイントを注視する 環境（音、他者の存在など）に五感で気が付く	どこに何を記入するかわかる 検索した情報からやりたいこと、作りたいことを選ぶ 五感で気が付いたものを選ぶ	調べたもの、まとめたものを発表する 集団活動に参加する 録画・撮影して伝える しぐさ、声で伝える 内言語がある生徒にはボイス機能アプリを使って伝える
総合	端末で調べる やるべきことが分かる 出た意見がわかる	項目ごとに分ける 自分の好みを選ぶ	資料にまとめる 自分のやったこと、やり方を伝える
職Ⅰ 職Ⅱ	手順表から内容を理解する	自分にできそうな作業がわかる	終わりやできたを伝える 助けを求める

情報活用のスキルを高めるほどに、モラルの面も高めないといけない（例）チームスで学校外の人に連絡してしまうなど。
情報を得るためには、視覚的な支援や情報の精選などは必要不可欠

重度

- 写真を見る
- 掲示物を見比べる
- 見本・完成物からイメージする

具体物を使用する

- 提示されたものから選択する → 教師が情報を提示
- 教師が身振り手振りで発信する → 教師自身が情報

教師のかかわり方

情報活用能力 Ver.1

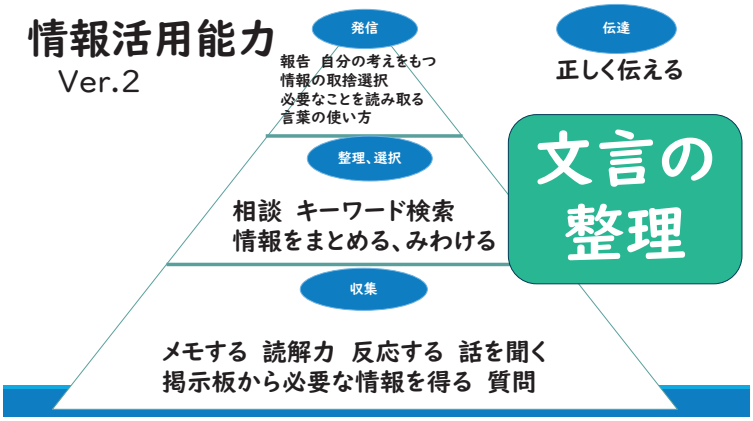
発信・実践
報告　自分の考えをもつ
言葉の使い方　改善・調整

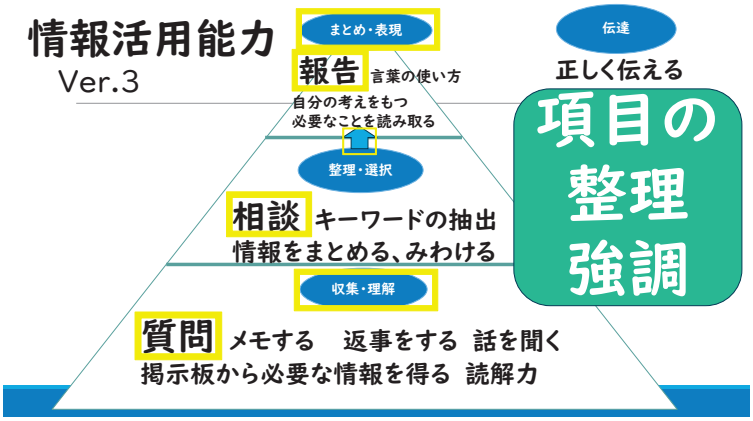
整理、選択
相談　キーワード検索　比較・分析
必要なことを読み取る、情報の取捨選択

収集
五感を使い情報を得る　質問
メモする　読解力　反応する　話を聞く

伝達
正しく伝える

軽度





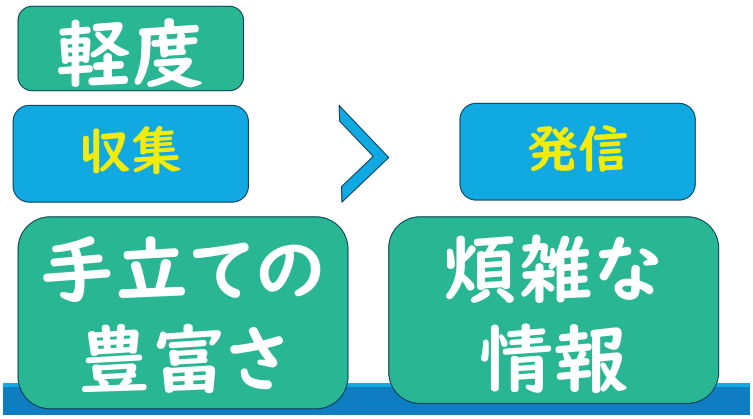
	収集	整理・選択	発信
個別 国数自立	国:文章、俳句を読む、聞く ニュースを読む　イラストから読み取る 数:メニュー表などから値段を見る タブレットで値段を調べる　自分の体重等のデータ 自立:自分の身体について 全体:教員とのやりとりから情報を得る	国:5W1Hなど基にまとめる　メモから文章へ 調べた内容から文章を精選する 数:予算内で注文できるものを選択 データを基に表、グラフの作成 自立:目標と照らし合わせ必要な運動選ぶ 全体:やりとりの中でわかっていることとわからないことを明らかにする	国:相手にわかりやすく話す、伝える 作文で表現する わかったことを発表、他の人は聞いて自分の考えをまとめる 自立:運動の実践 全体:わからないことを伝え、その場でレクチャーし、すぐに実践
集団 理社美音体 家道特外	同じ流れ、同じ提示の仕方　手本や見本を見る 話している人(CT)に注目させる pptなどの視覚支援　インターネットを使った調べ学習 動画の視聞　アプリの活用　動き等を撮影する 教師:席順の工夫(友達から情報を得る)	適切なやり方を選択する　自分から教師に質問する ワークシートに書き出し、実践できるか検討する 教師が確認する　意思表示カードから選択して提示する 視覚支援のイラスト等から選択する グループワークで共有　自分の動きや動作を分析 教師:STとすぐに相談できる雰囲気　チームワーク	発表する　ワークシートにまとめる クリップボードに入力　指や文字で書く タブレットを活用する　改善して運動に取り組む 教師:発表順や方法に配慮する
総合	パンフレット　本　HP等から テーマを明確にする 教師:HPを限定することのメリットデメリットを考える	文章の取捨選択　活用するHP等の選択 テーマやトピック事に 体験を伴わせることで自分の得た情報が正しいかを考える	ワークシートにまとめる タブレットでまとめる 模造紙等にまとめて掲示する
職Ⅰ 職Ⅱ	事業所について調べる　作業の様子を撮影してみる 実習のしおりを見る　CTの指示を聞く、見本を見る 自分から質問する　必要な言葉(やりとり)を覚える メモを取る　得意不得意に気付く 教師:情報の精選と提示の仕方の工夫	自分に合った仕事を考える 自分の課題から今取り組むべきことを考える 手順通りに作業する 連絡相談をする	より良い方法を考え実践する 報告する お客様目線で考える

情報活用能力 / 教科等	収集・理解	整理・選択	まとめ・表現
集団 理社美音体 家道特外	話している人(CT)に注目させる pptや手本、動画などの視覚支援 インターネットを使った調べ学習 アプリを活用させる 自分の動き等を撮影させる 席順を工夫し、友達から情報を得られるようにする 同じ流れ、同じ提示の仕方をする	ワークシートに書き出し、実践できるか検討させる 自分から質問させる 視覚支援のイラストや意思表示カードから選択して提示させる グループワークで共有させる 自分の動きや動作を分析させる	発表の場面を設る ワークシートにまとめさせる クリップボードに入力させる タブレットを活用させる 改善して運動に取り組ませる 模造紙等にまとめて掲示させる 発表順や方法に配慮する
総合	パンフレットや本、HP等から情報収集させる テーマを明確に伝え、理解させる HPを限定することのメリットデメリットを考える	文章の取捨選択をさせる 活用する本、HP等の選択をさせる テーマやトピック毎にまとめさせる 体験を伴わせることで自分の得た情報が正しいかを考えさせる	
職Ⅰ 職Ⅱ	事業所について調べさせる メモを取らせる わからないことを質問させる 必要な言葉(やりとり)を覚えさせる CTの指示を聞かせる、見本を見させる 得意不得意を考えさせる 指示書や実習のしおり等を見て理解を促す 自分から質問できるように発問を工夫する 情報の精選と提示の仕方の工夫する	連絡相談の必要性を考えさせ実践させる 手順通りに作業させる 自分に合った仕事を考えさせる 自分の課題から今取り組むべきことを考えさせる	より良い方法を考え実践させる 必要な情報を報告させる お客様目線で考えさせる 自分の適性から進路を考えさせる

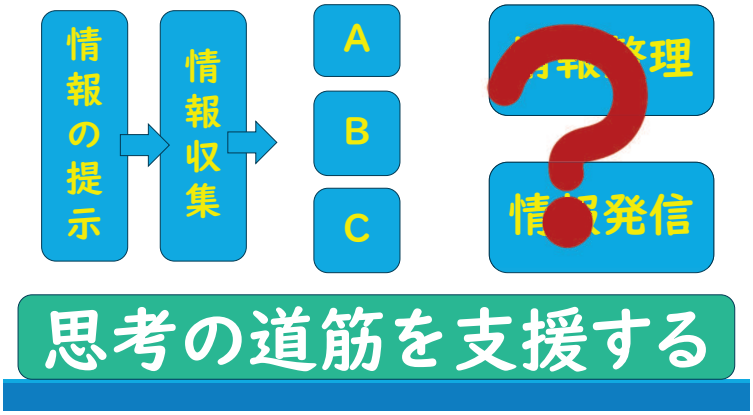
【総合】
・教師が"意図"をもって情報を提示する。実体験が伴わないと理解が難しいことが多い。
・収集はできるが、コピペしただけでどんな情報が具体的に分かっていないことが多いため整理・選択の仕方を教えていく。

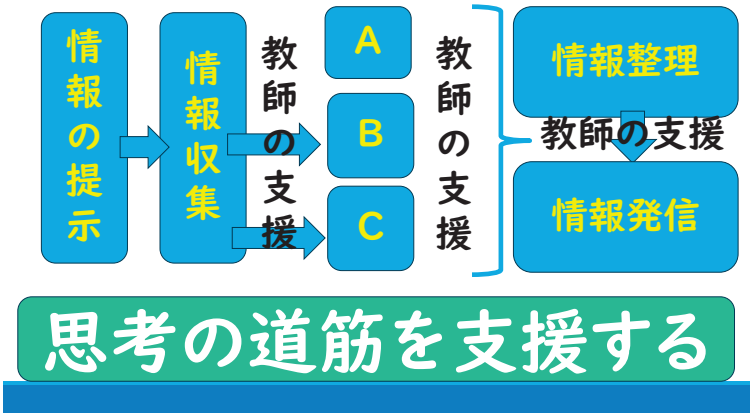
【職業Ⅰ・Ⅱ】
・サービス班:自分を振り返るとき、まずは気付いてほしいことを指摘、その次に改善。
・農園班:　作業内容の提示の仕方の工夫。終わりの時間を提示し、見通しをもたせる。
・工芸班:他の人の失敗を見て、自分自身の行動を見直す。
※情報の収集力は課題。問いに対しての必要な情報を収集できているか
　自分を正しく評価できているか、正しい課題を理解しているか

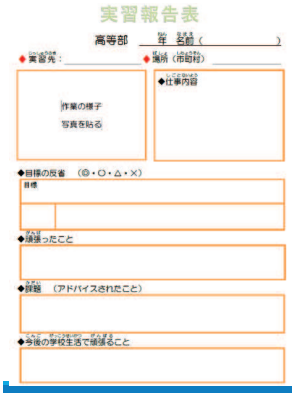
※国数自立はこの実態に応じて、学習指導要領を網羅していくことによって、育成できると考えられる。


軽度
収集
発信
手立ての豊富さ
煩雑な情報

発表する
ワークシートにまとめる
Teams
Class Note Book
教師が何を選択するか


情報の提示
情報収集
A
B
C
情報整理
情報発信
思考の道筋を支援する


情報の提示
情報収集
教師の支援
A
B
C
教師の支援
情報整理
教師の支援
情報発信
思考の道筋を支援する



実習報告書の作成

基本的には同じフォーマットで作成する
実態に応じてフォーマットを変更する

①見本と指示書をもとに作成

②見本とひらがな表記　教師の支援で入力

③見本とひらがな表記　教師の支援でシール

④項目の簡素化　教師の支援でシール

② teamsのチームからファイルを選択する

指示書や見本の配付

不完全な発信

・下線の消失
・項目の欠如
・間隔の変化

↓

情報収集の苦手さ

本研究での理想の姿

読みやすい段落分け
書式のズレ等なし

↓

適切な情報収集

↓

他生徒への伝達

研究のまとめ

（1）卒業後の豊かな生活のために皇都部で身につけておくべき情報活用能力は何であるか？

➡ 1. 情報を収集する能力
2・情報を発信する能力

良い収集から良い発信

研究のまとめ

重度

（2）情報活用能力の指導において大事なポイントや意識していることはなんですか？

➡ 情報の提示の仕方

視覚的に見やすい
実物に近く、五感を使う

研究のまとめ

重度

（3）普段生徒に情報を提示する際に意識していることがあれば教えてください

➡ 生徒自身が情報に気付けるよう提示して待つ

生徒の興味関心を惹く

研究のまとめ

軽度

（2）情報活用能力の指導において大事なポイントや意識していることはなんですか？

➡ 生徒とのやりとり

やりとりの中で整理
生徒の思考を深める

研究のまとめ

軽度

（3）普段生徒に情報を提示する際に
意識していることがあれば教えてください

➡ 情報の提示の仕方

見せ方と繰り返し
思考の道筋を示す

高等部研究テーマ（Ｒ６年度設定）

卒業までに身に付けさせたい
情報活用能力の整理

⬇

情報活用ピラミッド～やまびこモデル～
情報活用実践リスト　の作成

今年度の研究の概要

○ 情報活用ピラミッド
～やまびこモデル～

○ 情報活用実践リスト

△ 個人の実践　実習報告書

今後の課題

①さらなる検証による実践の積み重ね
②中間層への有効な指導の手立ての確立
③安定して情報活用能力が実践できる
環境づくり

ご清聴ありがとうございました

研究にご協力いただいた
学部の先生方をはじめ
多くの先生方に感謝申し上げます

令和８年２月５日（木）
第３回全体研究会
高等部

令和７年度
寄宿舎研究

テーマ設定の理由

（１）舎生の実態

・指示待ちが多く、発信が少ない
・経験が少なく、活動のアイデアが出にくい
・未経験のことへの挑戦を躊躇する傾向がある

テーマ設定の理由

（２）昨年度の課題と本年度のねらい

・対人面で受動的な姿勢が見られた
・寄宿舎だからこそできる経験から成長を
・周囲と折り合いを付けながら自分らしさを発揮する

令和７年度　寄宿舎研究主題

興味・関心を広げて社会性を養う
～寄宿舎の強みを生かした生活実践～

研究目標

（１）舎生の成長に向けた環境整備と実践

舎生一人一人の実態に応じたかかわり方を模索し、指導員間での考察・実践・検証のプロセスを通して、適切な手立てや環境整備を行い、舎生の確かな成長に繋げる。

研究目標

（２）寄宿舎指導員としての専門性の向上

寄宿舎生活の強みを生かした「社会性の育成」に関する研究を通して、指導の幅や見聞を広げ、指導員としての指導力向上を図る。

研究内容

（１）寄宿舎の強みと支援の整理
（２）事例検討の実施
（３）変容の見取りと成果の検証
(まとめ)

研究実践

（１）寄宿舎の強みと支援の整理

研究実践（１）寄宿舎の強みと支援の整理

寄宿舎で養える社会性とは？？

【本研究における「社会性」の定義】

◆対人関係スキル： 協調性、マナー、コミュニケーション能力（伝える・受け取る・理解する）

◆状況適応能力：その場に適応する力（周りを見る、TPOに合わせた服装・身だしなみ）

◆規範意識： 場面に応じたルールや雰囲気に合わせて行動する力

研究実践（１）寄宿舎の強みと支援の整理

寄宿舎で養える社会性とは？？

【舎生の共通した課題】

・人とのかかわり方や距離感
・その場の雰囲気に合わせた行動の困難さ

研究実践（１）寄宿舎の強みと支援の整理

寄宿舎の強みとは？？

【３つのキーワード】

・引継ぎ (指導の連続性と深化)

・異年齢集団でできる経験
(ピア・モデリング)

・子供たち発信からの取り組み (主体的活動)

研究実践（１）寄宿舎の強みと支援の整理

寄宿舎の強みとは？？

引継ぎ（指導の連続性と深化）

日々の引継ぎは単なる情報の伝達にとどまらず、指導の意図や背景を共有し,「チーム支援」を機能させる場とする。

・変容の確認
・指導の連続性
・学校との連携
・舎生への配慮

研究実践（１）寄宿舎の強みと支援の整理

寄宿舎の強みとは？？

異年齢集団でできる経験
（ピア・モデリング）

先輩が後輩に教え、後輩が先輩を見て学ぶという「育ち合い」が生まれるのが寄宿舎の良さである。

- かかわりの創出
- 効果的なフィードバック

研究実践（１）寄宿舎の強みと支援の整理

寄宿舎の強みとは？？

子供たち発信からの取り組み
（主体的活動）

行事や活動においては、単に楽しむことだけでなく、その活動を通して子供たちが「どう変わったか」という視点を重視する。

- ニーズの汲み取り
- 経験の拡充
- ハードルの除去

研究実践

（２）事例検討
①舎生A(高１ 女子)

研究実践（２）事例検討

対象舎生の選定と重点目標の設定

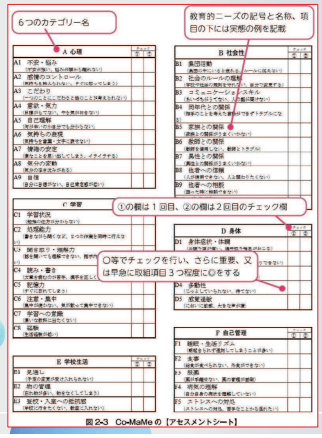


図 2-3 Co-MaMe の【アセスメントシート】

独立行政法人国立特別支援教育総合研究所編著
『こころの病気のある子供の教育支援 Co-MaMeガイド』
のアセスメントシートを活用し2名の舎生を対象とした。

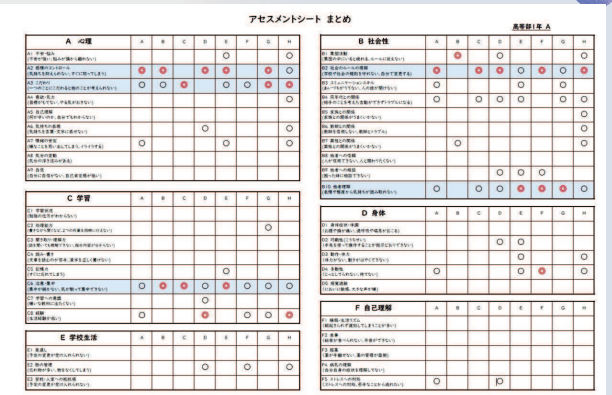
研究実践（２）事例検討　① 舎生A (高１ 女子)

実態の概要

本年度、地域の中学校から本校に入学した。自分の思い通りにならない場面では、感情を制御できずに主張を押し通そうとしたり、他者への暴言や手を出したりする行動が見られることがある。対人面ではパーソナルスペースへの意識が薄く、性別を問わず過度な接触を好む傾向がある。また、寄宿舎での生活スキルは、その時の気分に左右され、行動が粗雑になる時もある。余暇時間においては、やるべき活動がないとスマホに依存する傾向があり、日課時間に影響を及ぼすという課題もある。

研究実践（２）事例検討　① 舎生A (高１ 女子)

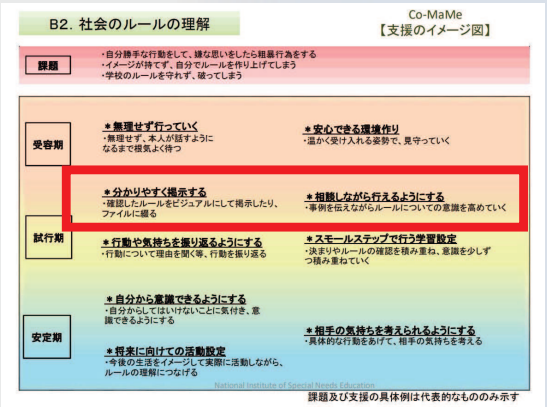
アセスメントシートの分析



『B2：社会のルールの理解』を教育的ニーズと捉えた

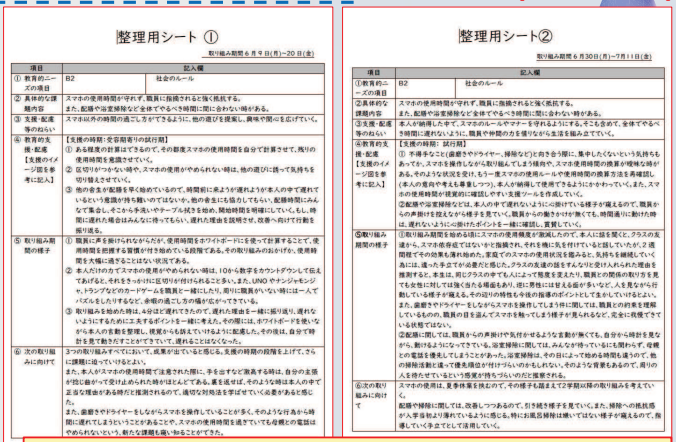
研究実践（２）事例検討　① 舎生A (高１ 女子)

支援のイメージ図を参考に段階を追った指導を展開した



受容期寄りの試行期から支援をスタートした

研究実践（２）事例検討　① 舎生A (高１ 女子)



スマホの使用時間と日課時間(配膳・浴室掃除)に合わせた生活を重点課題と捉えて、支援方法を検討した。

研究実践（２）事例検討　① 舎生A (高１ 女子)

整理用シート ③

取り組み期間 9月16日(火)～10月3日(金)

項目	記入欄	
①教育的ニーズの項目	B2	社会のルール
②具体的な課題内容	スマホの使用時間が守れず、職員に指摘されると強く抵抗する。 また、配膳や浴室掃除など全体でやるべき時間に間に合わない時がある。	
③支援・配慮等のねらい	スマホのルールやマナーを自分から意識して守れるようにする。また、全体でやるべき時間(特に浴室清掃)に遅れないように、職員や仲間の力を借りながら生活を組み立てていく。	
④教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	【支援の時期：安定期寄りの試行期】 ① スマホの使用時間に関して、使った時間はホワイトボードに記入しているが、それが残り時間に反映されていない状況である。まずは、なぜ時間を守るのかを確認し、自分で意識できる方法を一緒に考え、実践していく。(ストップウォッチの使用など) ②配膳活動は、曜日や時間を意識している様子が窺え、改善してきているが、浴室掃除に関しては、遅れることがあり、10月に中学部の体験入舎があるので、体験生をリードしていけるようにしていく。そこに向けて、先輩から引継ぎ掃除の時間や、やり方などを学んでおくように伝える。	
⑤取り組み期間の様子	①スマホの時間を自分で意識できるように、いくつか選択肢を与えると、スクリーンタイムで確認する方法を選択したので、2週間はその中りかでやってみようと伝えた。時間が超過しそうな時は職員が気付けるような声掛けをし、熱中しそうな時も他の選びに誘うなどの配慮がありながらも、時間を若干オーバーする日もあった。ただ、以前よりは意識している様子も見受けられている。2週間の取り組みを振り返る機会を2つ中で、職員の声掛けを減らした状況でも意識していこうと伝え、その１週間はスマホの使用時間に関しては職員からの声掛けをせずに様子を見た。時にスクリーンタイムを意識する言動が見られたものの、手持無沙汰になるとスマホを操作してしまうことが多く、使用時間を大幅にオーバーする日がほとんどであり、自分の力だけで使用時間を意識するのは難しく感じた。 ②体験入舎で中学部の生徒が宿泊することを伝えられると、嬉しそうな様子を見せていたので、その時に色々と教えられるように、先輩の動きや声の掛け方などを見ておくようにアドバイスした。「来週から改善が表れる」というセリフも多く、言葉の端々から意識している様子が窺えるので、改善に対してのようなかかわりが見られるか楽しみである。	
⑥次の取り組みに向けて	スマホの使用時間に関しては、職員の働きかけがあれば、意識できるが、自分だけのかでは意識することは難しい。今までの３つのセッションでは、発達障害の特性に応じた支援を展開していたが、次の取り組みでは、愛着障害の視点からの発達支援も試みていく必要を感じた。 いよいよ体験入舎も始まるので、どのような姿が見受けられるかが楽しみである。	

整理用シート ④

取り組み期間 10月6日(月)～10月10日(金)

項目	記入欄	
①教育的ニーズの項目	B2	社会のルール
②具体的な課題内容	スマホの使用時間が守れず、指導員に指摘されると強く抵抗する。 また、配膳や浴室掃除など全体でやるべき時間に間に合わない時がある。	
③支援・配慮等のねらい	スマホのルールやマナーを自分から意識して守れるようにする。また、全体でやるべき時間(特に浴室清掃)に遅れないように、指導員や仲間の力を借りながら生活を組み立てていく。	
④教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	【支援の時期：安定期寄りの試行期】 (1)前回の取り組みでは、指導員の声掛けや他の選びへの誘いなどがあれば、時間を意識できるが、そのような働きかけがないと、スマホに依存してしまう傾向が見られた。今回は、アプローチを変え、愛着の視点からの支援を試みることとする。具体的には、夕食までの時間はできるだけキーパーソンと活動する時間を作り、愛着の絆を深めていく。その際には、感情のラベリング支援をおこない、キーパーソンと一緒の活動をすると、ポジティブな感情が生じることを確かめていく。また、今回も月曜日に振り返りの時間を作り、本人と必要な支援を確認し、今回の期間はできるだけ守れるように働きかけ、良い感情を味わえるように配慮する。 (2)来てである体験生2名の不一緒に生活するので、愛着の目標やルールなどをさらに意識させることを狙いとして、体験生に対して、色々なことを教えたり、かかわったりする機会を作っていく。その中で、良いかかわりがみられた時は、プラスな声掛けをして、子供たちの自然な行動を言語化して伝えていこうと、異年齢集団の良さをさらに深めていく。	
⑤取り組み期間の様子	(1)週の頭に、先週までの振り返りと、今週の取り組みについて確認した。その中で、守れていた週(指導員が守れるように声を掛けた週)と、守れなかった週(声掛けをせずに様子を見た週)を本人に比較させると、「わからない」と答えていたので、守れていた週は、スマホ以外にも色々な選びをしていたことを伝え、そのような時間を増やすために、キーパーソンになるであろ担当の指導員と活動を一緒に行うことを確認した。キーパーソンとの活動は、行動に認知を同一にするために、同じ方向を向いて一緒に作業できる塗り絵(好きなアイドルグループの)を題材として選び、毎日実施した。その中で、同じ活動をすることで生じたであろう感情を放置せずに、感情のラベリングを行い、行動・認知にプラスして感情をつなげていくことも意識してかかわった。この週は、体験生が宿泊していたことで、活動の時間も多かったので、スマホの使用時間がオーバーすることはなかった。最終日に本人と担当の指導員で振り返りを行うと、「色々な選びをしたから」と守れた理由が本人の言葉からも確認できたので、一緒に取り組んだことで達成できたことを実感できるように声を掛けた。 (2)休憩生の動きを見ていて、配膳や浴室掃除の時に声を掛けたり、選びの場面でも、いつもはやらないボードゲームなどを取り出したりするなど、休憩生を意識している様子が窺えた。また、「舎生B先輩はーーしてた」という言葉がよく聞かれ、普段から先輩の言動を気にしていたことが確かめられた。	
⑥次の取り組みに向けて	(1)スマホ依存の背景には、愛着形成の問題が潜んでいると思うので、引き続きキーパーソンと一緒に活動する時間を作っていく。また、手持無沙汰になるとスマホを触ってしまうので、ゲームなど色々な活動に誘っていく。 (2)休憩人舎生が利用している時に周り気にしながら行動するなど成長した姿が見られたなので、いつも通りのメンバーの中でも、周りや時間を意識して動けるか確認していき、うまくいかない場合は休憩人舎中のことを振り返るなどして、意識を向けさせていく。	

研究実践（２）事例検討　① 舎生A (高１ 女子)

B2. 社会のルールの理解

Co-MaMe
【支援のイメージ図】

課題
- 自分勝手な行動をして、嫌な思いをしたら粗暴行為をする
- イメージが持てず、自分でルールを作り上げてしまう
- 学校のルールを守れず、破ってしまう

受容期
- ＊無理せず行っていく
  - 無理せず、本人が話すようになるまで根気よく待つ
- ＊安心できる環境作り
  - 温かく受け入れる姿勢で、見守っていく

試行期
- ＊分かりやすく掲示する
  - 確認したルールをビジュアルにして掲示したり、ファイルに綴る
- ＊相談しながら行えるようにする
  - 事例を伝えながらルールについての意識を高めていく
- ＊行動や気持ちを振り返るようにする
  - 行動について理由を聞く等、行動を振り返る
- ＊スモールステップで行う学習設定
  - 決まりやルールの確認を積み重ね、意識を少しずつ積み重ねていく

安定期
- ＊自分から意識できるようにする
  - 自分からしたいけないことに気付き、意識できるようにする
- ＊相手の気持ちを考えられるようにする
  - 具体的な行動をあげて、相手の気持ちを考える
- ＊将来に向けての活動設定
  - 今後の生活をイメージして実際に活動しながら、ルールの理解につなげる

National Institute of Special Needs Education

少しずつ段階は上がってきているが、スマホに関しては依存傾向が強くアプローチをかえることに

研究実践（２）事例検討　① 舎生A (高１ 女子)

新たな視点による支援の展開

愛着障害に着目したアプローチ

学部との情報交換会おいて、本人の行動背景に「脱抑制型愛着障害」の傾向がある可能性が示唆され、そこに着目したアプローチの必要性を確認した。

指導員間において、米澤好史著『愛着障害は何歳からでも必ず修復できる』等の文献を参考に検討を重ね、愛着障害に対する支援を指導計画に組み込んだ。

研究実践（２）事例検討　① 舎生A (高１ 女子)

整理用シート ⑤

取り組み期間 10月20日(月)～10月31日(金)

項目	記入欄	
①教育的ニーズの項目	B2	社会のルール
②具体的な課題内容	スマホの使用時間が守れず、職員に指摘されると強く抵抗する。 また、配膳や浴室掃除など全体でやるべき時間に間に合わない時がある。	
③支援・配慮等のねらい	スマホのルールやマナーを自分から意識して守れるようにする。また、全体でやるべき時間(特に浴室清掃)に遅れないように、職員や仲間の力を借りながら生活を組み立てていく。	
④教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	【支援の時期：安定期寄りの試行期】 (1)スマホ依存の背景には、愛着形成の問題が潜んでいると思うので、引き続きキーパーソンと一緒に活動する時間を作っていく。また、手持無沙汰になるとスマホを触ってしまうので、ゲームなど色々な活動に誘っていく。 (2)休憩人舎生が利用している時に周りを気にしながら行動するなど成長した姿が見られたなので、いつも通りのメンバーの中でも、周りや時間を意識して動けるか確認していき、うまくいかない場合は休憩人舎中のことを振り返るなどして、意識を向けさせていく。	
⑤取り組み期間の様子	(1)実習明けだったので、実習前の守れていた時のことを振り返り、引き続き意識しながら生活していこうと伝えて、取り組み期間をスタートした。前回の取り組みと同様に、キーパーソンと一緒に作業をして、愛情の絆を深める時間を作った。今回は感情のラベリングを行う際に、『誰と一緒に行動したから楽しい気分になったよ』と言葉にして確認していき、行動・認知・感情をつなげていくことをめ指けた。また、それ以外の時間において、職員側が主導権を握り、先手をとっての行動の支援(他の活動に誘うなど)を行ったことも、スムースに行動を切り替えられるきっかけになったと思った。そのような取り組みが実りだしたのか、就寝前に母親に電話をして泣かなければならなかった時も、以前は暴言をはいたり職員に手を出したりしていたが、素直に受け入れられるようになっていた。さらに、すべての日に対してスマホの使用時間がオーバーすることは無かった。 (2)休憩人舎生が来た時は、お手本となるように意識して行動できていたので、できるなかが積めていることは、見極めることができた。その期間が終わり、先輩との生活が戻ると、周りの様子に合わせながら配膳や浴室掃除に向かう様子が見られているが、ただ、周りの舎生が時間より早く動き出してしまうので遅れないという背景も見て取れる。	
⑥次の取り組みに向けて	実習明けは、職員の髪の毛を触ったり、ボディタッチの機会も多く、人恋しい様子が窺えた。取り組み期間を終えてから、スマホの使用時間がルールになってきているので、行き渡りつつの支援となるが、もう一度ルールの確認やなぜ守らなければいけないのかを伝えていく。	

研究実践（２）事例検討　① 舎生A (高１ 女子)

整理用シート ⑥

取り組み期間 11月10日(月)～11月28日(金)

項目	記入欄	
①教育的ニーズの項目	B2	社会のルール
②具体的な課題内容	スマホの使用時間が守れず、職員に指摘されると強く抵抗する。 また、配膳や浴室掃除など全体でやるべき時間に間に合わない時がある。	
③支援・配慮等のねらい	スマホのルールやマナーを自分から意識して守れるようにする。また、全体でやるべき時間(特に浴室清掃)に遅れないように、指導員や仲間の力を借りながら生活を組み立てていく。	
④教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	【支援の時期：試行期 】 (1) スマホの使用時間がルールになっている様子が見られるので、なぜルールがあるのか、守らなければどうなるのか？ということを再度確認していく。依存の背景には、愛着形成の問題が潜んでいると思うので、引き続きキーパーソンと一緒に活動する時間を作っていく。その間には、気持ちが良い感情を共有できるように関わっていくと共に、ほったり、褒めたりといった後手の支援でなく、指導員全体で先手の支援を心掛けていくこれ、本生が必要なイベントがあるので、活動を通して成長できるように活用していく。 (2) 配膳時間や浴室掃除など、休憩人舎中の様子を見る中で、時間を意識して行動できていたので、引き続き、周りの様子に合わせながらやるべきことの優先順位を判断しながら、行動に移せるように関わっていく。	
⑤取り組み期間の様子	(1)取り組みのはじめに、先週のスマホ使用時間の振り返りをおこなった。その中で、スマホ時間がオーバーした時に取り出したことがあったので、対応した指導員は嫌な気分になったことや、時間を守れると関わった指導員も気持ちが良い気分になる、一緒に生活をしている友達も良い気分になることを伝えた。キーパーソンとの活動は、前回までの流れを継いで、クリスマスの装飾で使う雪だるま(好きなアイドルグループ)をモチーフにしたものを紙粘土で作成することとした。前回の塗り絵はご愛嬌程ではなかったものの、不器用ながらも頑張って作っていた。また、手持ち無沙汰にならないように、先手を取り様々な選びに誘ったり、本生と一緒にみんなが楽しめる活動(アイスバーティー)を企画した。活動を企画し、色々な仕事を進めていく中で随所に楽しみにしている様子が見受けられると共に、実施日の近くに来星が欠席すると、気にする言動がみられた。当日は残念ながら１名欠席者が出てしまったが、参加できた生徒は本生のおかげでみんなが楽しく活動できていた。本生が初めてイベントを企画や運行したことで、周りの生徒の様子を気にする言動が増えてきて、活動を通して日頃の生活に対しても良い影響が出始めている。様々な取り組みが始まったのか、スマホ時間もオーバーしないように意識している様子が見受けられている。 (2)配膳時間は、指導員や舎生からの声掛けなど行動を促すきっかけが無くても、自分から時計を見て動けるようになっていて、手を変え品を変え取り組んできた成果が出ている。 浴室掃除に関しては、母親からの LINE での連絡があると、そちらに気が向いてしまう様子が見られた。このような行動の背景には、愛着障害の特性(自分の興味関心よりも他人に向いてしまう)が潜んでいることも推察されるので、引き続き安定的な手立てを探っていきたい。	
⑥次の取り組みに向けて	スマホの使用時間や掃除などの時間も2学期の初めに比べると、改善されてきている。指導員からの声掛けや動きを促すきっかけが無くても守れるようになってきたのは成長を感じる。引き続き、愛着障害に対しての支援も継続していきながら、課題克服に向けてアプローチしていく。	

研究実践（２）事例検討　① 舎生A (高１ 女子)

愛着障害に着目したアプローチ

(１)キーパーソンによる愛着の絆の形成

①キーパーソンの決定

愛着とは「特定の人」と結ぶ絆なので、「特定の人」すなわち、その絆を結ぶ最初の相手である「愛着対象」を決めてから支援をすることが必要とのことなので担当指導員をキーパーソンとして決定した。

研究実践（２）事例検討　① 舎生A (高１ 女子)

愛着障害に着目したアプローチ

(１)キーパーソンによる愛着の絆の形成

②　キーパーソンを中心とした支援

舎生Aがキーパーソンを意識できるように、舎生Aに対する情報をキーパーソンに集約させる体制を指導員間で整え、「キーパーソンから始まり」「キーパーソンで終わる」という支援を意識して関わった。

研究実践（２）事例検討　① 舎生A (高１ 女子)

愛着障害に着目したアプローチ

(２)感情のラベリングと認知の結合

①　キーパーソンと１対１で一緒の活動

感情は１人では気づけないことが多いので、一緒に何かをして、感じたことを共有して感情の存在に気付かせることを意識した。
作業は、同じ方向を向いて取り組める、ぬり絵や粘土を使っての作業をした。

研究実践（２）事例検討　① 舎生A (高１ 女子)

愛着障害に着目したアプローチ

(２)感情のラベリングと認知の結合

②　感情のラベリング支援による感情学習

一緒の活動をする中で、「同じことをした」(行動)、とおなじことが起こった(認知)を確認し(行動と認知の共有)、そこで「お互いに同じ気持ちになった」(感情)ことを確認できる場面が生じる。この行動・認知・感情の連合学習(行動と認知と感情をくっつける活動)が感情学習となる。

研究実践（２）事例検討　① 舎生A (高１ 女子)

変容と成果(まとめ)

様々な支援を継続した結果、徐々にスマホの使用時間が守れるようになり、食堂掃除、浴室掃除に遅れることも無くなった。
その要因としては、従来の行動変容を促すアプローチに加え、愛着障害の特性を理解した支援を平行して行ったことが大きく寄与していると考えられる。

研究実践

（２）事例検討
②舎生B(高３ 女子)

研究実践（２）事例検討　② 舎生B (高３ 女子)

実態の概要

地域の中学校から本校高等部に入学し、１年生の時から全泊で入舎している。生活スキルはおおむね自立していて、寄宿舎での日常生活に支障はない。コミュニケーション面では、言葉の意味や名称を間違えて覚えていたり、話の内容が断片的に入っていたりするなど、正しく理解できていないこともある。また、自信のなさからか未経験のことに対して極端に拒む様子が見受けられる。

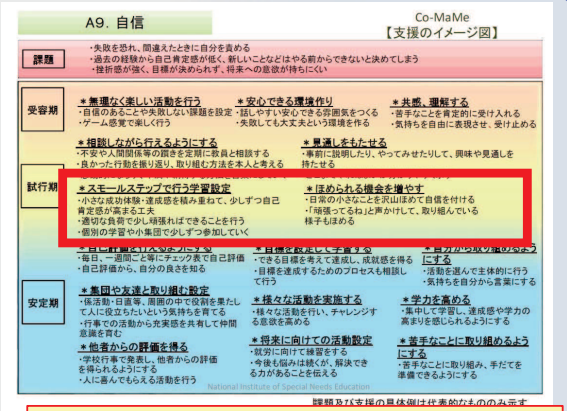
研究実践（２）事例検討　② 舎生B (高３ 女子)

アセスメントシートの分析

「Ａ９：自信（自分に自信がない、自己肯定感が低い）」
を教育的ニーズと捉えた。

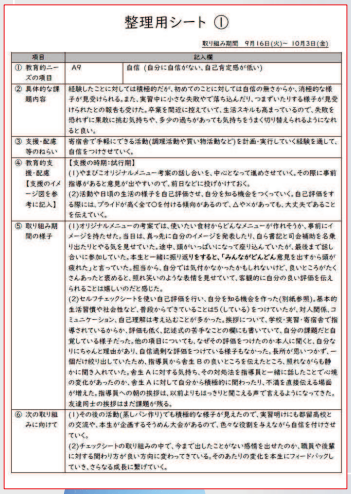
研究実践（２）事例検討　② 舎生B (高３ 女子)

支援のイメージ図を参考に段階を追った指導を展開した



『試行期』から支援をスタートした

研究実践（２）事例検討　② 舎生B (高３ 女子)



整理用シート ①

取り組み期間　9月16日(火)～ 10月3日(金)

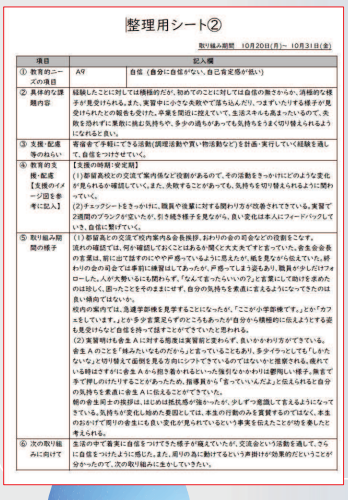
項目	記入欄	
① 教育的ニーズの項目	A9	自信（自分に自信がない、自己肯定感が低い）
② 具体的な課題内容	経験したことに対しては積極的だが、初めてのことに対しては自信の無さからか、消極的な様子が見受けられる。また、実習中に小さな失敗や「落ち込んだり、つまずいたりする様子が見受けられたとの報告を受けた。卒業を間近に控えていて、生活スキルも高まっているので、失敗を恐れずに果敢に挑む気持ちや、多少の過ちがあっても気持ちをうまく切り替えられるようになれると良い。	
③ 支援・配慮等のねらい	寄宿舎で予期にできる活動（調理活動や買い物活動など）を計画・実行していく経験を通して、自信を付けていく。	
④ 教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	【支援の時期：安定期】 (1)卒業を控えて、卒業後の生活に関する話し合いを、中心となって進めさせていく。その際に事前指導があると意見が出やすいので、前日などに投げかけておく。 (2)活動や日頃の生活の様子を自己評価させ、自分を知る機会をつくっていく。自己評価をする際には、プライドが高くまでひ付ける機会があるので、ムやみかあっても、大丈夫であることを伝えていく。	
⑤ 取り組み期間の様子	(1)オリジナルメニューの考案では、使いたい食材からどんなメニューが作れそうか、事前にイメージを持たせた。当日は、真っ赤に自分のイメージを発表したり、自ら書記と司会補助をる来り出たりとやる気を見せていた。途中、頑張り一点いになって取り込んでいたが、最後まで頑張り合いに参加していた。本生と一緒に振り返りをすると、「みんながどんどん意見を出すから頭が疲れた」と言っていた。担当から、自分では気付かなかったかもしれないけど、良いところがたくさんあったと褒めると、照れ笑いのような表情を見せていて、客観的に自分の良い評価を伝えられることは嬉しいのだと感じた。 (2)セルフチェックシートを使い自己評価を行い、自分を知る機会を作った（別紙参照）。基本的生活習慣や社会性など、書殺かんで下でいることは5（している）をつけていたが、対人関係、コミュニケーション、自己理解は考えふむことが多かった。振返について、学校・実習・寄宿舎で指導されているからか、評価も低く、記述式の言手なことの欄には書いていて、自分の課題だと自覚している様子だった。他の項目については、なぜその評価をつけたのか本人に聞くと、自分なりにちゃんと理由があり、自信過剰な評価をつけている様子とは違った。長所が思いつかず、一個だけ挙げ出していたため、指導員から舎生Ｂの良いところを伝えたところ、照れながらも静かに聞き入れていた。舎生Ａに対する気持ち、その対処法を指導員と一緒に話したことで心境の変化があったのか、舎生Ａに対して自分から積極的に関わったり、不満を直接伝える場面が増えた。指導員への朝の挨拶は、以前よりもはっきりと聞こえる声で言えるようになってきた。友達同士の挨拶はまだ課題が残る。	
⑥ 次の取り組みに向けて	(1)その後の活動（美しバン作り）でも積極的な様子が見えたので、実習明けにも都留高校との交流で、本生が企画するような人大会があるので、色々な役割を与えながら自信を付けさせていく。 (2)チェックシートの取り組みの中で、今まで出したことがない感情を出せたのが、職員や後輩に対する関わり方が良い方向に変わってきている。そのあたりの変化を本生にフィードバックしていき、さらなる成長に繋げていく。	

「失敗を恐れず挑戦する意欲」
「失敗した際の感情の切り替え」
の育成の必要性を感じたので、
以下の２点に焦点を当てた。

１活動を通じた成功体験の蓄積
→役割分担を通じて自信を深める。

２セルフチェックシートによる自己理解
→客観的に自分を見つめ、課題を自覚する。

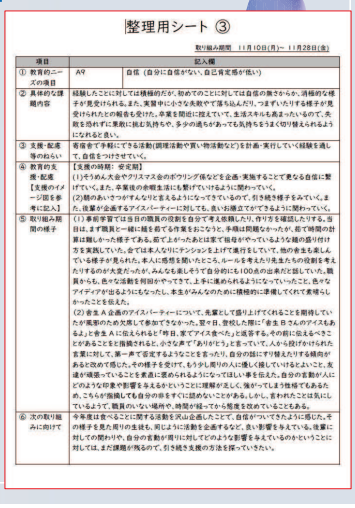
研究実践（２）事例検討　② 舎生B (高３ 女子)



整理用シート②

取り組み期間　10月20日(月)～ 10月31日(金)

項目	記入欄	
① 教育的ニーズの項目	A9	自信（自分に自信がない、自己肯定感が低い）
② 具体的な課題内容	経験したことに対しては積極的だが、初めてのことに対しては自信の無さからか、消極的な様子が見受けられる。また、実習中に小さな失敗や「落ち込んだり、つまずいたりする様子が見受けられたとの報告を受けた。卒業を間近に控えていて、生活スキルも高まっているので、失敗を恐れずに果敢に挑む気持ちや、多少の過ちがあっても気持ちをうまく切り替えられるようになれると良い。	
③ 支援・配慮等のねらい	寄宿舎で予期にできる活動（調理活動や買い物活動など）を計画・実行していく経験を通して、自信を付けさせていく。	
④ 教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	【支援の時期：安定期】 (1)そうめん大会やクリスマス会のボランゲ係などを企画・実施することで更なる自信に繋げていくまた、卒業後の余暇生活にも繋げていけるように関わっていく。 (2)頼のあいさつがすんなりと言えるようになってきているので、引き続き様子をみていくまた、後輩が企画するアイスパーティーに対しても、良いお膳立てができるように関わっていく。	
⑤ 取り組み期間の様子	(1)春近年度では当日の職員の役割を自分で考え取組んだり、作り方を確認したりする。当日は、まず職員と一緒に話を聞くの作業をおこなうと、手順は問題なかったが、前で時間の計算は難しかった様子である。前で上がったあとは家で指母が作っているような補の盛り付け方を実践していた。会では本人なりにテンションをよげて進行をしていて、他の舎生も楽しんでいる様子が見られた。本人に感想を聞いたところ、ルールを考えたり先生たちの役割を考えたりするのが大変だったが、みんなも楽しそうで自分のおにも100点の出来だと話していた。職員からも、色々な活動を何回かやってきて、上手に進められるようになっていったこと、色々なアイディアが出るようになったし、本生がみんなのために積極的に準備してくれて素晴らしかったことを伝えた。 (2)舎生Ａ企画のアイスパーティーについて、先輩として盛り上げてくれることを期待していたが風邪のため欠席して参加できなかった。翌々日、登校した際に「舎生Ｂさんのアイスもあるよ」と舎生Ａに伝えられると「明日、家でアイス食べた」と返答する。その前に伝えるべきことがあることを指摘されると、小さな声で「ありがとう」と言っていて、人から投げかけられた言葉に対して、第一声で否定するようなことを言ったり、自分の話にすり替えたりする傾向があると改めて感じた。その様子を受けて、もう少し周りの人に慣れ接していけるようにと、友達が頑張っていることを素直に褒められるようになってほしい事を伝えた。自分の言動が人にどのような影響を与えるかということに理解が乏しく、強がってしまう性格であるためこちらが指摘しても自分の非をすぐに認めないことがあるしかし、言われたことは気にしているようで、職員のいない場所や、時間が経ってから相度を改めていることもある。	
⑥ 次の取り組みに向けて	生活の中で喜美に自信をつけさせた様子が窺えていたが、交流会という活動を通して、さらに自信をつけたように感じた。また、周りの為に動けてるという声掛けが効果的だということが分かったので、次の取り組みにあかしていきたい。	

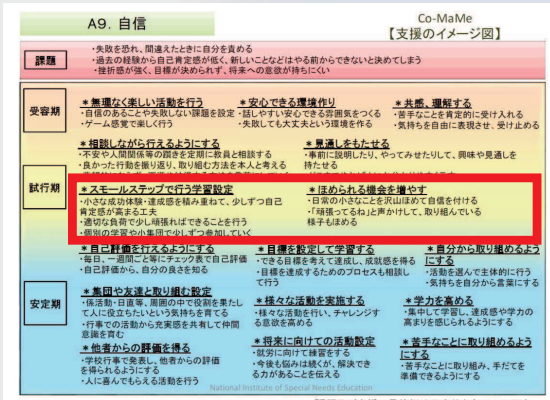


整理用シート ③

取り組み期間　11月10日(月)～ 11月28日(金)

項目	記入欄	
① 教育的ニーズの項目	A9	自信（自分に自信がない、自己肯定感が低い）
② 具体的な課題内容	経験したことに対しては積極的だが、初めてのことに対しては自信の無さからか、消極的な様子が見受けられる。また、実習中に小さな失敗や「落ち込んだり、つまずいたりする様子が見受けられたとの報告を受けた。卒業を間近に控えていて、生活スキルも高まっているので、失敗を恐れずに果敢に挑む気持ちや、多少の過ちがあっても気持ちをうまく切り替えられるようになれると良い。	
③ 支援・配慮等のねらい	寄宿舎で予期にできる活動（調理活動や買い物活動など）を計画・実行していく経験を通して、自信を付けさせていく。	
④ 教育的支援・配慮【支援のイメージ図を参考に記入】	【支援の時期：安定期】 (1)そうめん大会やクリスマス会のボランゲ係などを企画・実施することで更なる自信に繋げていくまた、卒業後の余暇生活にも繋げていけるように関わっていく。 (2)頼のあいさつがすんなりと言えるようになってきているので、引き続き様子をみていくまた、後輩が企画するアイスパーティーに対しても、良いお膳立てができるように関わっていく。	
⑤ 取り組み期間の様子	(1)春近年度では当日の職員の役割を自分で考え取組んだり、作り方を確認したりする。当日は、まず職員と一緒に話を聞くの作業をおこなうと、手順は問題なかったが、前で時間の計算は難しかった様子である。前で上がったあとは家で指母が作っているような補の盛り付け方を実践していた。会では本人なりにテンションをよげて進行をしていて、他の舎生も楽しんでいる様子が見られた。本人に感想を聞いたところ、ルールを考えたり先生たちの役割を考えたりするのが大変だったが、みんなも楽しそうで自分のおにも100点の出来だと話していた。職員からも、色々な活動を何回かやってきて、上手に進められるようになっていったこと、色々なアイディアが出るようになったし、本生がみんなのために積極的に準備してくれて素晴らしかったことを伝えた。 (2)舎生Ａ企画のアイスパーティーについて、先輩として盛り上げてくれることを期待していたが風邪のため欠席して参加できなかった。翌々日、登校した際に「舎生Ｂさんのアイスもあるよ」と舎生Ａに伝えられると「明日、家でアイス食べた」と返答する。その前に伝えるべきことがあることを指摘されると、小さな声で「ありがとう」と言っていて、人から投げかけられた言葉に対して、第一声で否定するようなことを言ったり、自分の話にすり替えたりする傾向があると改めて感じた。その様子を受けて、もう少し周りの人に慣れ接していけるようにと、友達が頑張っていることを素直に褒められるようになってほしい事を伝えた。自分の言動が人にどのような影響を与えるかということに理解が乏しく、強がってしまう性格であるためこちらが指摘しても自分の非をすぐに認めないことがあるしかし、言われたことは気にしているようで、職員のいない場所や、時間が経ってから相度を改めていることもある。	
⑥ 次の取り組みに向けて	今年度は食べることに関する活動を沢山企画したことで、自信がついてきたように感じた。その様子を見た周りの生徒も、対によい活動を企画するなど、良い影響を与えている。後輩に対しての関わりや、自分の言動が周りに対してどのような影響を与えているのかということに対しては、まだ課題が残るので、引き続き支援の方法を探っていきたい。	

研究実践（２）事例検討　② 舎生B (高３ 女子)



支援を繰り返す中で徐々に成長が見られた。

研究実践（２）事例検討　② 舎生B (高３ 女子)

【① 活動を通じた成功体験の蓄積】

寄宿舎オリジナルメニュー(やまびこナンカレー)考案の話し合いや、都留高校との交流会の案内係など、簡単にできる活動で成功体験を重ねたことで、少しずつ自信を付けてきた。

最終的には、本生が中心となり「そうめん大会」企画して、準備や進行も立派に努め、堂々とした姿を見ることができた。

研究実践（２）事例検討　② 舎生B (高３ 女子)

【② セルフチェックシートによる自己理解】

セルフチェックシートに取り組む前の様子

負けず嫌いな性格であり、自分の非や間違えを認めにくい傾向があった。また、プライドが高くチェックシートや振り返りの時もすべてに〇を付けることが多かった。

研究実践（２）事例検討　② 舎生B (高３ 女子)

【② セルフチェックシートによる自己理解】

セルフチェックシートに取り組む際に配慮した点

「△や✕（課題）があっても、ありのままの自分で大丈夫である」という受容的なかかわりを心掛けた。

研究実践（２）事例検討　② 舎生B (高３ 女子)

【② セルフチェックシートによる自己理解】

セルフチェックシートに取り組んだ後の様子

過大な自己評価ではなく、自らの課題を素直に自覚できるようになっていった。 これにより、指導員に対しても素直な感情を表出できるようになり、対人面にも良い変化が現れ始めた。

研究実践（２）事例検討

② 舎生B (高３ 女子)

【成果】

今までの生い立ちの中で、年下と関わる機会が少なかったためか、後輩に対して、ぎこちなさや嫉妬心をみせることが多かった。

指導員がその気持ちに寄り添い、時には受け止め、時には改めさせるというサイクルを繰り返したことで、周囲と自分の気持ちに折り合いをつけて、自分らしく振舞えるようになってきている。

変容の見取りと成果の検証（研究のまとめ）

変容の見取りと成果の検証(研究のまとめ)

【①多角的な実態把握と専門性の向上】

・多角的な視点で舎生を捉え、アセスメントをおこなった。

・愛着障害や自己肯定感を高めるアプローチなど、一人一人の背景に応じた柔軟な指導を展開できた。

・専門的な文献を活用したことで、一貫性のある指導が実現した

変容の見取りと成果の検証(研究のまとめ)

【②指導体制の強化と方向性の共有】

・「指導の目的」と「研究の方向性」を常に意識したことで、統一した指導に繋がった。

・週の初め(月曜日)に指導員全員で前週の振り返りと今週の方針を共有したことで、指導の質の向上に繋がった

変容の見取りと成果の検証(研究のまとめ)

【③寄宿舎の強みを生かした社会性の育成】

・舎生同士の自然なかかわりを「指導の機会」として意図的に捉え、指導のポイントとしたことが有効であった。

・集団生活における「生きた経験」を効果的にフィードバックしたり、言語化して伝えてあげることで、周囲への興味・関心の広がりへのきっかけとなった。

変容の見取りと成果の検証(研究のまとめ)

【今後の課題】

・アセスメントツールのさらなる活用と定着

・「主体性」へのアプローチの深化

【おわりに・・・】

寄宿舎という「生活の場」だからこそできる支援を、妥協することなく追求することが、舎生の確かな成長につながることを再確認した一年であった。

来年度も舎生の実態を真摯に捉え、寄宿舎ならではの指導の在り方を深めていきたい。

研究主題（R６・７年度）

「情報活用能力の育成を目指した授業づくり」

山梨県立やまびこ支援学校　研究部

▸研究の目的とねらい

背景：
ICT利活用に留まらない「情報活用能力」を着実に身につける授業実践の必要性。
目的：
2年計画で授業づくりに焦点を当て、学習効果の最大化を図る。
授業研究を通した教職員の「授業力」と「授業の質」の向上。
2年次の焦点： 実践の蓄積と、学部ごとの具体的な手立ての明確化。

小学部の取り組みと成果

- **低学年グループ**
- 「操作」よりも「体験」。適切な場面での提示により、情報の受け取りやすさを向上。
- **中・高学年グループ**
  - 児童の実態差に応じた個別最適なICT活用。
  - 教師間での「効果的な活用場面」の共有が鍵。

▸共通の成果：

▸実態把握 → 目標の明確化 → 環境整備 → 評価・改善のプロセスの重要性を再確認。

中学部の取り組みと成果

- **視点**
- 情報をどう受け取り（インプット）、どう活用（アウトプット）するか。**インプットとアウトプットの循環**
- **インプットの精選：**
  - 情報を細分化し、繰り返し提示する。
  - 「友達の示範」を活用し、活動のイメージを明確化。
- **アウトプットの設定：**
  - 生徒に合った表現方法（多角的な視点での実態把握）を選択。
- **つまり・・・** インプットの質がアウトプットの質を左右する。単元計画の工夫が不可欠。

高等部の取り組みと成果

- **視点**
- 卒業後の生活を見据え、「得る力」と「発信する力」に焦点。
- **成果（やまびこモデルの構築）**
  - 「情報活用ピラミッド ～やまびこモデル～」の作成。
  - 「情報活用実践リスト」による具体的支援の共有。
- **価値：** 教員間で「卒業までに身に付けさせたい力」の意識と方向性を共有。

寄宿舎の取り組み

- **テーマ：** 集団生活を活かした社会性と興味・関心の拡大。
- **実践**
  - 多角的なアセスメント（愛着障害の視点や自己肯定感へのアプローチ）。
  - 指導員間での専門的知見の統一による一貫した指導。
- **成果**
  - 異年齢交流等を通じた「生きた経験」の価値づけ。
  - 指導員が言語化して伝えることで、他者への興味を促進。

研究の総括
（1）実態把握と見通し

①視点をもちながらの実態把握

- 「どう受け取り、どう表現するか」を教科のねらいとリンクさせる。

研究の総括
（1）実態把握と見通し

②インプットとアウトプットの両輪

- 授業づくりにおいて、表現（アウトプット）までを見越した指導の見通しと環境設定を行う。（**インとアウトの見通し**）

研究の総括
（２）ICT活用と相乗効果

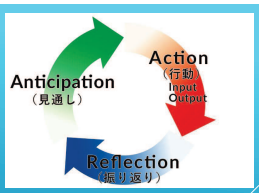
③ICTと実体験のバランス：

- ICT機器の有用性と、実体験の重要性を融合させる。
- 適切な場面・効果的な活用方法を教員間で確認し、学習効果を最大化する。

成果の波及

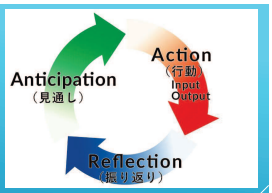
情報活用の視点を持つことで、既存の授業内容や手立ての再構築につながった。

今後の展望
（学校全体での授業改善）



キーワード：AARサイクル
（見通し・行動・振り返り）
「研修」を自分事とし、協働的な学びを実現する。

今後の展望
（学校全体での授業改善）



意図的な振り返り
単なる事後評価ではなく「手立ては妥当だったか」を深く協議する場を定着させる。
組織的な取り組み
学部を超えた授業改善の仕組みづくり。

今後の課題

教科横断的・系統的な視点でのさらなる検討。

実践の蓄積と、児童生徒の変容の追跡調査。

児童生徒の「かがやくえがお」と
「主体性をもって生きる」姿を目指し、
本研究の成果を日々の実践に還元していく。